

熊本県文化財調査報告 第132集

島 廻 遺 跡

九州縦貫自動車道（人吉～えびの）建設に伴う埋蔵文化財調査

1 9 9 3 年

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告 第132集

しま まわり
島 廻 遺 跡

九州縦貫自動車道(人吉～えびの)建設に伴う埋蔵文化財調査

1 9 9 3 年

熊本県教育委員会

序 文

熊本県教育委員会では、日本道路公団の九州縦貫自動車道（八代～えびの間）建設に伴い、昭和57年から路線予定地内の埋蔵文化財の発掘調査を進めてまいりました。

ここに報告する熊本県人吉市赤池水無町所在の鳥廻遺跡は、平成2年度と平成3年度に分けて発掘調査を実施し、平成4年度に報告書作成を行ったものであります。

調査の結果、縄文時代早期と先土器時代の良好な資料が検出され、大きな成果を得ることができました。

この報告書が、埋蔵文化財の保護に対する認識を深め、学術・研究上の一助になれば幸いです。

発掘調査に際しては、多方面で日本道路公団福岡建設局人吉工事事務所から御配慮を賜り、感謝いたしております。さらに、専門調査員の先生方からは適切な御指導がありました。ここに心から厚く御礼を申しのべます。

平成5年3月31日

熊本県教育長 道 越 温

例 言

1. 本書は、日本道路公団の九州縦貫自動車道（人吉～えびの間）建設工事に伴い、事前
に実施した埋蔵文化財調査の報告書である。
2. 発掘調査を実施した遺跡は、日本道路公団福岡建設局からの委託を受けて熊本県教育
庁文化課が行ったもので、当初人我胸遺跡としていたが、字名から鳥廻遺跡（熊本県人
吉市赤池水無町鳥廻）と改めた。
3. 発掘調査は平成2年9月～11月と平成3年5月～9月に実施し、整理・報告書作成は
平成4年度に行った。出土遺物・資料は熊本県教育庁文化課で保管している。
4. 発掘現場での遺構の実測・写真撮影は、各調査員で行った。遺物の実測は、主として
山城敏昭、江原浩司があたり、一部、木村元浩の協力を得た。遺構・遺物実測図の製図、
遺構・遺物分布図の作成・製図は、山城・江原・日置正香・六田育子が行った。遺物の
写真撮影は山城が行った。
5. 写真図版の空中写真は（株）スカイサーベイに委託した。
6. 本書の執筆は山城が行い、一部を松本健郎（第I章第1節）、江原（第III章第2・3
節2の一部）が担当した。
7. 本書の編集は、熊本県教育庁文化課で行い、山城が担当した。

凡 例

1. 本書に示した方位は、磁北を用いた。
2. 本書に使用した地形図は、日本道路公団福岡建設局人吉工事事務所から提供を受けた
ものを基礎にしている。
3. 遺構の深さは、断りがないものは、検出面からの深さである。
4. 挿入中の遺物番号は、掲載順に1から順次つけており、各遺物分布図の番号と一致す
る。
5. III層以下の遺構・遺物分布図等に伴う地形図は、1枚下層の上面の地形を示している。

本文目次

序文	
例言	
第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	3
第Ⅱ章 遺跡の概要	5
第1節 遺跡の環境	5
1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	8
第2節 遺跡の概要	9
第3節 遺跡の層位と包含層	11
第Ⅲ章 調査の成果	13
第1節 Ⅱ層上面の調査	14
1. 1号土抗について	14
第2節 Ⅲ層の調査	17
1. 遺構について	18
2. Ⅲ層出土の遺物	24
第3節 Ⅳ層の調査	27
1. 遺構について	27
2. Ⅳ層出土の遺物	31
第4節 Ⅴ層の調査	37
1. 遺構について	37
2. Ⅴ層出土の遺物	39
第5節 その他の遺物	40
第Ⅳ章 総括	43
第1節 各層の調査成果の要旨	43
第2節 調査成果と問題点	44
参考文献	46

挿 図 目 次

第1図	グリッド配置図	3	第17図	Ⅲ層遺物・礫分布図	24
第2図	球磨川流域図	5	第18図	石器実測図（Ⅲ層）	25
第3図	周辺遺跡分布図	6	第19図	石器実測図（Ⅲ層）	26
第4図	地形断面図	9	第20図	6号集石実測図	27
第5図	遺跡周辺地形図	10	第21図	石器実測図（6号集石）	28
第6図	基本土層図	11	第22図	7号集石実測図	29
第7図	Ⅱ層上面遺構分布図	13	第23図	Ⅳ層集石・遺物・礫分布図	30
第8図	1号土坑出土遺物実測図	14	第24図	土器実測図（Ⅳ層）	31
第9図	1号土坑実測図	15	第25図	石器実測図（Ⅳ層）	33
第10図	Ⅳ層上面遺構分布図	17	第26図	石器実測図（Ⅳ層）	34
第11図	1号集石実測図	18	第27図	石器実測図（Ⅳ層）	35
第12図	2号集石実測図	19	第28図	8号集石実測図	37
第13図	2号集石掘り込み実測図	20	第29図	Ⅴ層集石・遺物・礫分布図	38
第14図	3号集石実測図	21	第30図	石器実測図（Ⅴ層）	39
第15図	4号集石実測図	22	第31図	石器実測図	40
第16図	5号集石実測図	23			

表 目 次

第1表	調査進行表	4	第4表	Ⅳ層石器計測表	36
第2表	周辺遺跡一覧表	7	第5表	Ⅴ層石器計測表	39
第3表	Ⅲ層石器計測表	26	第6表	石器計測表	41

圖 版 目 次

圖版 1 調查区全景

圖版 2 調查区遠景

圖版 3 調查区近景

圖版 4 1号土杭

圖版 5 1号·3号集石

圖版 6 2号集石

圖版 7 4号集石

圖版 8 5号集石

圖版 9 6号·8号集石

圖版10 1号土杭出土遺物

圖版11 6号集石出土遺物

圖版12 III層出土遺物

圖版13 IV層出土遺物

圖版14 IV層出土遺物

圖版15 V層出土遺物

圖版16 一括資料

報告書抄録

書名	島廻遺跡
副書名	九州縦貫自動車道（人吉～えびの）建設に伴う埋蔵文化財調査
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第132集
編著者名	山城敏昭
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	㊦862 熊本市水前寺6丁目18番1号
発行年月日	西暦 1993年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード	調査期間	調査面積	調査原因
島廻	人吉市赤池水無町字島廻	市町村：遺跡番号	19910924－ 19920907	約150㎡	道路建設

主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
縄文時代中期	1号土杭	縄文土器 (春日式系?)	1～5号集石は掘り込みあり
縄文時代早期	1号集石 2号集石 3号集石 4号集石 5号集石 6号集石 7号集石	石皿 早期土器 石皿・蔽石・石鏃・石核・使用痕のある剥片 細石核	
旧石器時代		台形石器 ナイフ形石器	

第I章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

昭和52年3月29日付けで日本道路公団福岡建設局から熊本県教育委員会に対し、九州縦貫自動車道（八代～えびの間）の分布調査依頼があり、同年8月4日～6日と8月10日～12日の2回にわたる分布調査を実施した。その結果、下記の遺跡（参考地）を確認した。

八代市 東片町古墳群 上片町条里遺跡
球磨郡山江村 淡島遺跡 狸谷遺跡 本城遺跡 高城遺跡 大丸・藤ノ迫遺跡
人吉市 笹栗山遺跡 梢山遺跡 佐無田狩所遺跡 石清水遺跡 七地条里遺跡
尾丸横穴群 原城跡 尾丸古塔碑群 七地遺跡 島廻遺跡 昼子遺跡

この分布調査の結果を基に、八代～人吉間の試掘調査を行い、昭和57年～62年にかけて発掘調査を行った。

その後、改めて人吉～えびの間の分布調査を行い、前回の調査で確認されていた昼子遺跡を含めて、6遺跡（昼子遺跡、白鳥平A遺跡、白鳥平B遺跡、赤池永谷遺跡、島廻遺跡、古屋敷遺跡）を確認した。

この結果を日本道路公団福岡建設局へ回答し、その後日本道路公団から文化庁長官あて協議書が提出され、熊本県教育委員会の意見を付けて文化庁長官あてに発送した。文化庁からは、「熊本県教育委員会と協議の上事前に発掘調査を実施すること。なお、調査の結果、重要な遺構等が発見されたときは、設計変更等によりその保存に配慮すること」という通知があった。

熊本県教育委員会は日本道路公団の依頼を受け、平成元年度から各遺跡の試掘調査を行った。島廻遺跡については、文化財保護主事大田幸博が平成元年10月に実施し、「アカホヤ層下から、剥片類が検出され、この地点が縄文時代早期の遺跡であり本調査が必要である。また調査地近くの切り通し崖面のシラス層直上から剥片類が検出されることから先土器時代の遺物の包含層が存在する可能性がある」との結果を得た。

そこで、日本道路公団と協議のうえ、本格的な発掘調査は平成2年度から実施することになり、文化課嘱託松舟博満が平成2年9月から11月にかけてⅢ層途中までの調査を実施したが、松舟が赤池永谷遺跡の発掘調査を担当したため一時中断した。

平成3年度は文化財保護主事山城敏昭が5月末から調査を再開し、途中（7月中旬）嘱託福原博信が調査に加わり、9月初めまで調査を行った。

調査の組織

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	江崎 正（平成2年度文化課長） 大塚正信（平成3・4年度文化課長）
調査総括	隈 昭志（教育審議員・課長補佐） 桑原憲彰（平成2年度文化財調査第二係長） 松本健郎（平成3・4年度文化財調査第二係長）
調査・報告書 作成	山城敏昭（文化財保護主事、平成3年度調査・報告書） 松舟博満（嘱託、平成2年度調査） 福原博信（嘱託、平成3年度調査） 江原浩司（臨時職員、報告書） 日置正香（整理嘱託、報告書） 六田育子（嘱託、報告書）
専門調査員	山中一郎（京都大学助教授）
調査事務局	中川義孝（平成2年度教育審議員・課長補佐）、松崎厚生（平成3・4年度課長補佐） 上村忠道（平成2年度主幹・経理係長）、木下英治（平成3・4年度主幹・経理係長）、大広美枝子（平成2・3年度主任主事）、川上勝美（平成2・3年度主任主事）、高濱保子（平成4年度参事）、相馬治久（平成4年度参事）
道路公団	村田由雄（人吉工事事務所長）、久保伸一（人吉工事事務所副所長） 安岡東一（人吉工事事務所工事長）、喜多 徹（人吉工事事務所庶務課長） 財津 勝（人吉工事事務所工務課長）

第2節 調査の方法と経過

九州縦貫自動車道は、遺跡が立地する丘陵の末端をほぼ南北にかすめて建設される計画である。調査区画の設定は、この自動車道の二つの幅杭を使用して行った。

まず、STA440+40（中心杭）から西北西方向11mの幅杭とSTA440+60（中心杭）から西北西方向11mの幅杭を結ぶ線を基準とし、5m×5mの区画を設定した。この区画の指定は東から西へA～D、北から南へ1～5という呼称によって行った。調査の基本単位は、この区画である。

調査の手順と方法は、以下のとおりである。

まず、重機による表土除去を行い、その清掃の後トランシットを使用して、5m×5mの区画を設定した。

調査は、遺構の検出と遺物の検出を中心に実施した。

遺構は、平面形の確認を行った後に、土層観察のため土手を残し掘り下げた。その観察後土手を取り除いて全体像を確認する。その間に作成される資料には、1/10に縮尺して作る平面図、



第1図 グリッド配置図

土層断面図、断面図などがある。

遺物の検出は、上記した遺構調査の完了後に実施した。区画に沿って四方に土層観察用の土手を残し、層ごとに掘り下げ遺物を検出する。遺物（礫も含む）は1/20の平面図に記入し、取り上げ順に遺物番号を付した。その際、平面図に遺物の絶対高や註記事項（型式、文様、器種、石材等）を記入するようにした。こうして、無遺物層まで掘り下げた後、残した土手の土層を1/20で実測し、最終的に土手も層ごとに同じ手順で掘り下げた。

また、必要に応じて、遺構や遺物出土状況の写真撮影や調査区全体の空中撮影を行った。

こうした発掘調査作業のほか、関連調査として周辺に分布する遺跡の所在確認調査を行った。その成果は、第Ⅱ章第1節の歴史的環境の項に示している。調査経過は次表に示す。

第1表 調査進行表

年 度	平成2年（担当 松舟博満）				
月	9 月	10 月	11 月		
調 査 内 容	表土剥ぎ 清掃 杭打ち II層上面の調査 1号土杭調査 II層掘り下げ III層上面遺構検出 III層の調査 III層遺物検出・実測 IV層上面遺構検出 1号集石調査				
年 度	平成3年（担当 山城敏昭）				
月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月
調 査 内 容	調査区清掃 2号集石調査 III層遺物検出・実測 IV層上面遺構検出 IV層の調査 IV層遺物検出・実測 3～7号集石調査 V層の調査 V層遺物検出・実測 8号集石調査 土層実測撤去				

第Ⅱ章 遺跡の概要

第1節 遺跡の環境

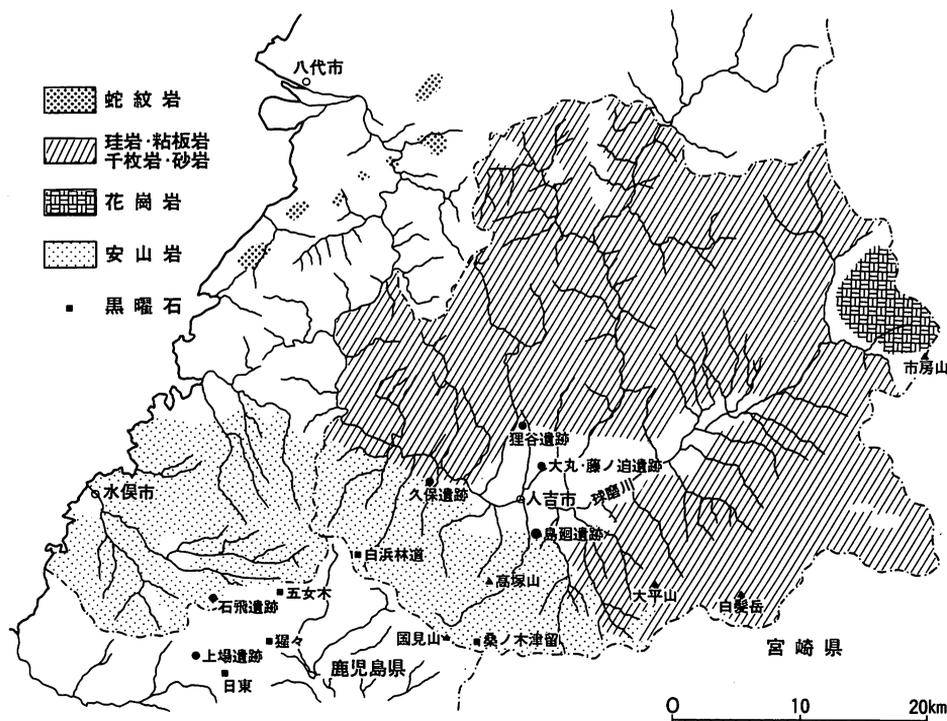
1. 地理的環境

鳥廻遺跡の所在する人吉市は、九州山地に挟まれ大きく口を開けた標高100m～200mを測る断層盆地である。

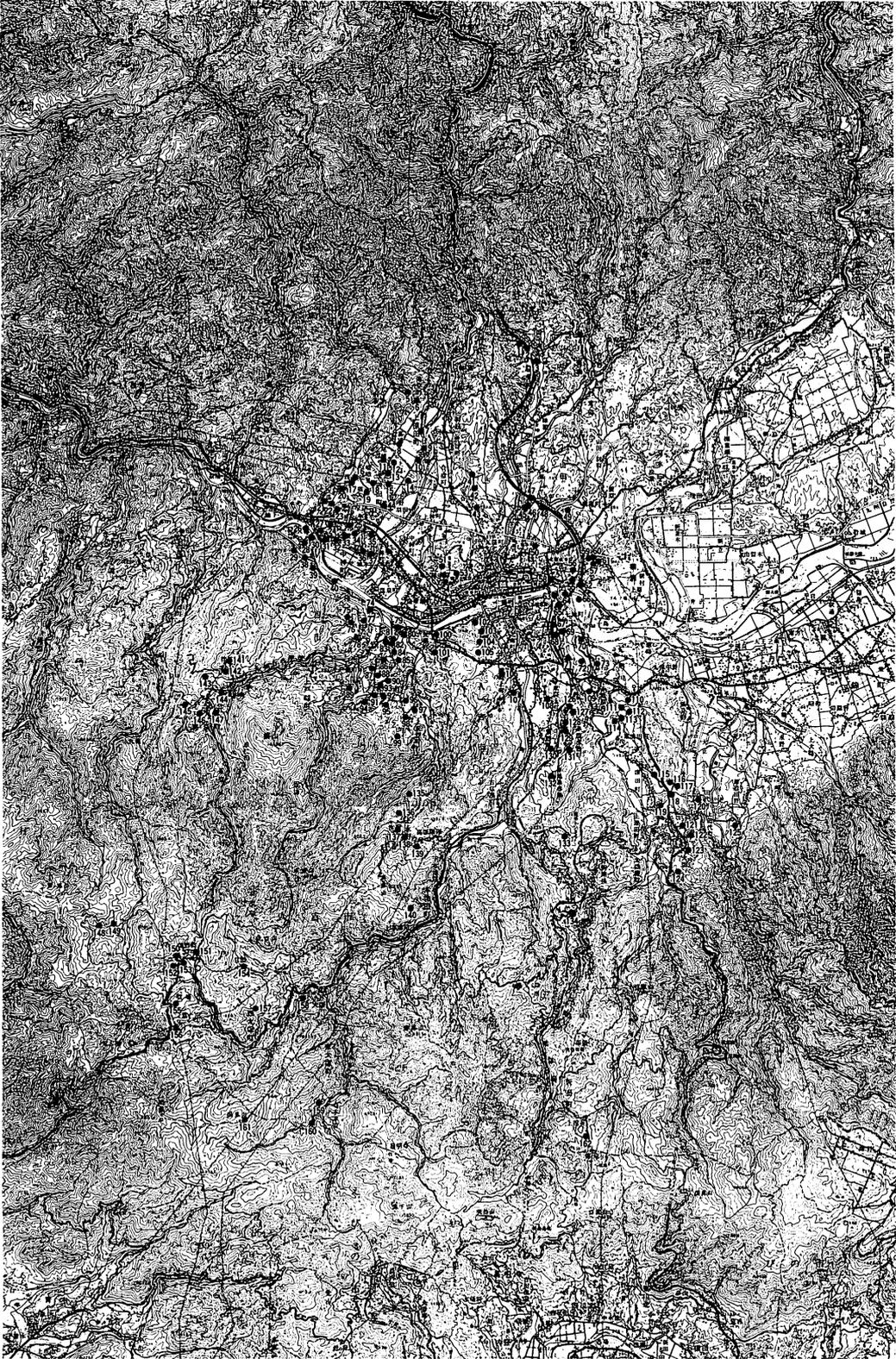
盆地の中央には、球磨川が東西に貫流する。この球磨川は、人吉盆地を抜けるとその流れを大きく北に変え、蛇行しながら八代（不知火）海に注ぐ全長115kmの九州でも有数の河川である。また球磨川の流域面積は、約1880km²で熊本県の面積の25%を占めている。支流の数は、実に80本以上を数える県下有数の規模をもつ河川である。

人吉盆地は、この球磨川の流路に沿って存在する沖積地と台地・丘陵に分けられ、その周辺に山地が位置する。

下球磨地方（人吉市周辺）の球磨川南岸は、始良起源の入戸火砕流（シラス）を基盤とする台地・丘陵が分布している。またこの丘陵は、加久藤（宮崎県）～大口（鹿児島県）にかけて



第2図 球磨川流域図



第3図 周辺遺跡分布図

第2表 周辺遺跡一覽表

番号	遺跡名	所在地	時代	番号	遺跡名	所在地	時代
1	山中	谷山	旧	82	内原	人吉市	縄縄
2	山	江村	旧	83	原	市	縄縄
3	狸	大字	旧	84	栖	下戸	縄縄
4	谷	山田	縄	85	葉	越町	縄縄
5	岡	山	縄	86	生	内	縄縄
6	野	字	縄	87	取	原	縄縄
7	口	山	縄	88	取	木	縄縄
8	蔵	山	縄	89	取	戸	縄縄
9	塚	山	縄	90	取	野	縄縄
10	瀬	山	縄	91	取	野	縄縄
11	寺	山	縄	92	取	野	縄縄
12	崎	山	縄	93	取	野	縄縄
13	宝	山	縄	94	取	野	縄縄
14	上	山	縄	95	取	野	縄縄
15	寺	山	縄	96	取	野	縄縄
16	田	山	縄	97	取	野	縄縄
17	龍	山	縄	98	取	野	縄縄
18	間	山	縄	99	取	野	縄縄
19	門	山	縄	100	取	野	縄縄
20	前	山	縄	101	取	野	縄縄
21	山	山	縄	102	取	野	縄縄
22	宮	山	縄	103	取	野	縄縄
23	田	山	縄	104	取	野	縄縄
24	原	山	縄	105	取	野	縄縄
25	府	山	縄	106	取	野	縄縄
26	A	山	縄	107	取	野	縄縄
27	B	山	縄	108	取	野	縄縄
28	田	山	縄	109	取	野	縄縄
29	保	山	縄	110	取	野	縄縄
30	坂	山	縄	111	取	野	縄縄
31	久	山	縄	112	取	野	縄縄
32	段	山	縄	113	取	野	縄縄
33	ノ	山	縄	114	取	野	縄縄
34	段	山	縄	115	取	野	縄縄
35	ノ	山	縄	116	取	野	縄縄
36	ノ	山	縄	117	取	野	縄縄
37	ノ	山	縄	118	取	野	縄縄
38	ノ	山	縄	119	取	野	縄縄
39	ノ	山	縄	120	取	野	縄縄
40	ノ	山	縄	121	取	野	縄縄
41	ノ	山	縄	122	取	野	縄縄
42	ノ	山	縄	123	取	野	縄縄
43	ノ	山	縄	124	取	野	縄縄
44	ノ	山	縄	125	取	野	縄縄
45	ノ	山	縄	126	取	野	縄縄
46	ノ	山	縄	127	取	野	縄縄
47	ノ	山	縄	128	取	野	縄縄
48	ノ	山	縄	129	取	野	縄縄
49	ノ	山	縄	130	取	野	縄縄
50	ノ	山	縄	131	取	野	縄縄
51	ノ	山	縄	132	取	野	縄縄
52	ノ	山	縄	133	取	野	縄縄
53	ノ	山	縄	134	取	野	縄縄
54	ノ	山	縄	135	取	野	縄縄
55	ノ	山	縄	136	取	野	縄縄
56	ノ	山	縄	137	取	野	縄縄
57	ノ	山	縄	138	取	野	縄縄
58	ノ	山	縄	139	取	野	縄縄
59	ノ	山	縄	140	取	野	縄縄
60	ノ	山	縄	141	取	野	縄縄
61	ノ	山	縄	142	取	野	縄縄
62	ノ	山	縄	143	取	野	縄縄
63	ノ	山	縄	144	取	野	縄縄
64	ノ	山	縄	145	取	野	縄縄
65	ノ	山	縄	146	取	野	縄縄
66	ノ	山	縄	147	取	野	縄縄
67	ノ	山	縄	148	取	野	縄縄
68	ノ	山	縄	149	取	野	縄縄
69	ノ	山	縄	150	取	野	縄縄
70	ノ	山	縄	151	取	野	縄縄
71	ノ	山	縄	152	取	野	縄縄
72	ノ	山	縄	153	取	野	縄縄
73	ノ	山	縄	154	取	野	縄縄
74	ノ	山	縄	155	取	野	縄縄
75	ノ	山	縄	156	取	野	縄縄
76	ノ	山	縄	157	取	野	縄縄
77	ノ	山	縄	158	取	野	縄縄
78	ノ	山	縄	159	取	野	縄縄
79	ノ	山	縄	160	取	野	縄縄
80	ノ	山	縄	161	取	野	縄縄
81	ノ	山	縄	162	取	野	縄縄

の山地に連なり、支流によって開析され谷を形成している。また人吉盆地全体を眺めた場合、中球磨地方の球磨川南岸の台地・丘陵は、白髪岳山地の麓に形成された、複合扇状地である。球磨川北岸では、川辺川によって形成された、扇状地と阿蘇溶結凝灰岩や入戸火砕流を基盤とする丘陵地がある。このように人吉盆地の台地・丘陵には、その生成の違いがある。

またこのような台地・丘陵及び沖積地を取り囲むように山地が広がる。このような環境の中、先史時代の人々の生活に欠くことのできない道具である石器の素材（石材）のあり方を球磨川流域での岩石・岩層の分布をみていく（第2図）。

鳥廻遺跡出土の石器の中で、最も多いのは、黒曜石・珪岩・安山岩である。

黒曜石は、人吉市桑の木津留と球磨村の白浜林道で産出が確認されている。また鹿児島県大口市の日東及びその周辺にも原産地が分布している。珪岩は、人吉盆地の北側の山地に岩脈があり、川原や礫層中に転石の形で存在し入手が容易である。また安山岩は、盆地南西の山地に分布し入手が容易である。これらの石器石材は、すべてそれぞれの支流によって運ばれ球磨川の川原で転石として容易に入手できる。

2. 歴史的環境（第3図）

鳥廻遺跡は、球磨川の支流である人我胸川の流域に存在する。ここでは、人吉市周辺（下球磨地方）の先土器時代及び縄文時代の遺跡について概観する。

(1) 旧石器時代

現在までに確認されている旧石器時代の遺跡は、人吉・球磨地方に31箇所を数える。これらの遺跡の多くが人吉市・山江村を中心とする地域に存在する。しかしこれらの遺跡の中で、狸谷遺跡、大丸・藤ノ迫遺跡、高城遺跡、鼓ヶ峰遺跡、天道ヶ尾遺跡、村山閘谷遺跡、血気ヶ峰遺跡、城・馬場遺跡第2地点、鳥廻遺跡、白鳥平A遺跡、白鳥平B遺跡、中尾別府遺跡の12遺跡を除けば、すべて表面採集によるものであり、その全体像については不明な部分が多く残されている。また、近年の開発に伴う発掘調査の増加により、AT（シラス）下位の石器文化が確認され、類例が増えつつある。狸谷遺跡（山江村）、久保遺跡（球磨村）、血気ヶ峰遺跡（人吉市）である。この中で血気ヶ峰遺跡のI石器文化は、曲野遺跡の石器文化段階に比定できるものである。

(2) 縄文時代

鳥廻遺跡では、縄文時代早期に属する遺物が出土した。人吉市周辺での早期の遺跡としては、狸谷遺跡、大丸・藤ノ迫遺跡、城・馬場遺跡、同第2地点、村山閘谷遺跡、鼓ヶ峰遺跡、天道ヶ尾遺跡、白鳥平A遺跡、赤池永谷遺跡、石清水遺跡、射場ノ本遺跡、深水谷川遺跡、益手遺跡、野々脇遺跡がある。この中で、狸谷遺跡、大丸・藤ノ迫遺跡では、壱ノ神式土器を中心に様々な土器が検出され、それに伴う遺構も検出された。またこれらの遺跡は、当時の集落のあ

り方を考える上で重要な遺跡である。

さらに、城・馬場遺跡、同第2地点、天道ヶ尾遺跡、白鳥平A遺跡では、手向山式土器の壺形土器が検出されている。この中で城・馬場遺跡と同第2地点は、検出された早期の土器中の手向山式土器の比率が高い遺跡である。これらの早期の遺跡相互の比較は、極めて興味深い。

また、島廻遺跡では中期と考えられる遺構が検出された。アカホヤ降灰以降、前・中期の遺跡は人吉球磨地方では激減する。その中で鼓ヶ峰遺跡では、曾畑式土器、船元式土器が検出され、射場ノ本遺跡では、並木式土器が出土している。

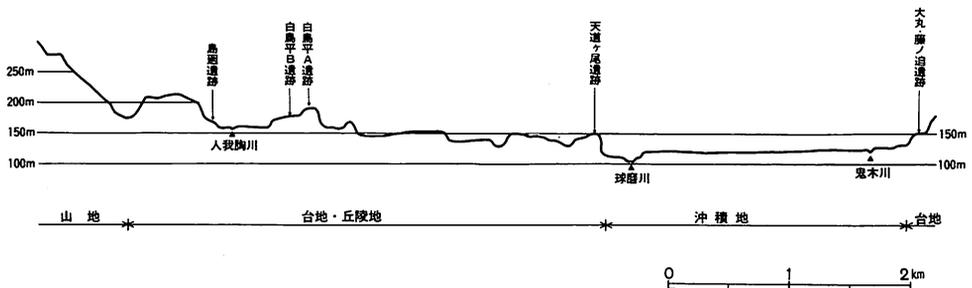
後・晩期の遺跡としては、中堂遺跡、アンモン山遺跡、天道ヶ尾遺跡、七地遺跡がある。この中で中堂遺跡は球磨川左岸低地に位置し、石器製作址が確認されている。このことは、当時の集落のあり方を考える上で興味深い。

第2節 遺跡の概要 (第5図)

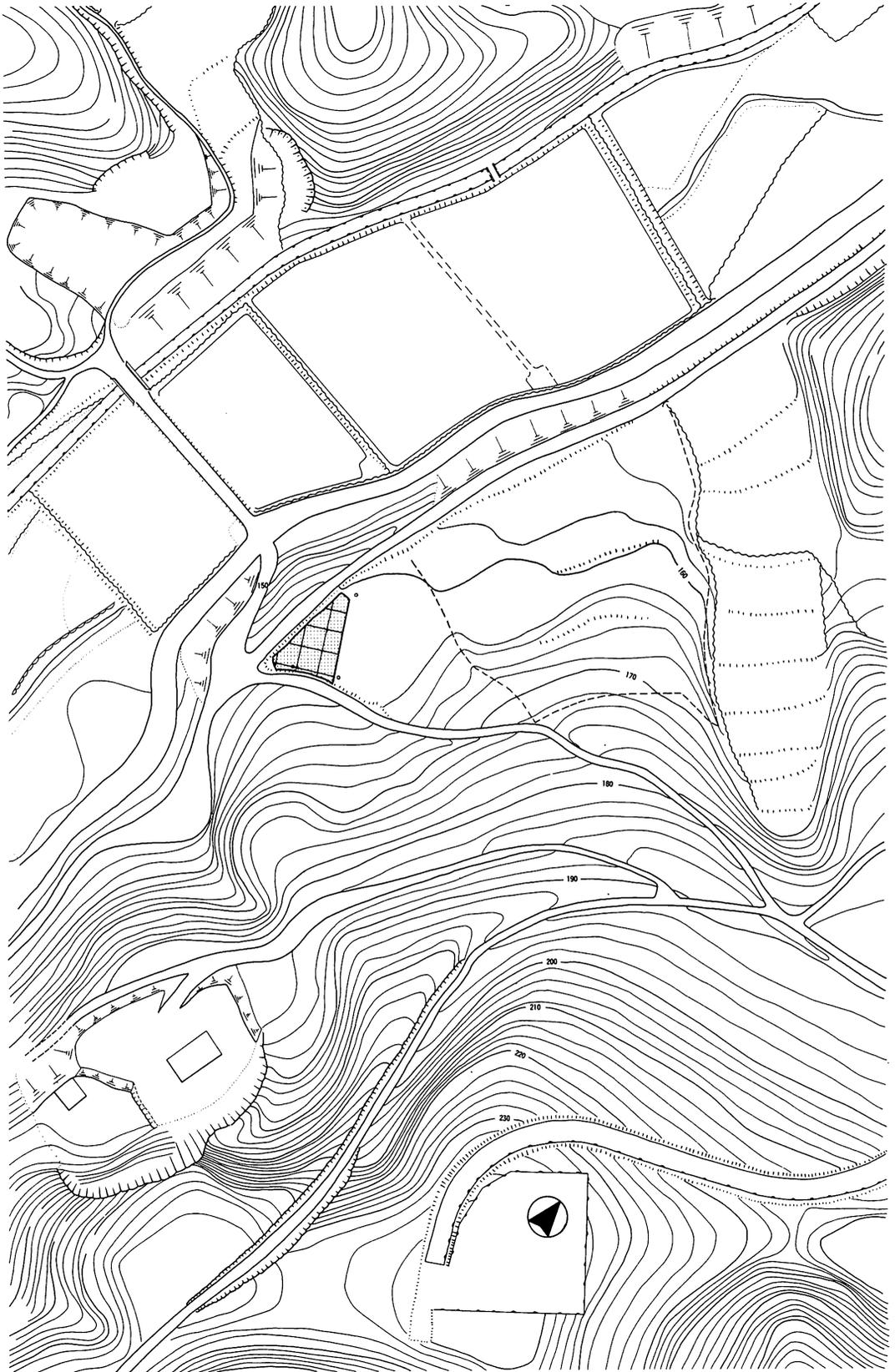
遺跡は、熊本県人吉市赤池水無町島廻に所在し、球磨川の支流である人我胸川の右岸に立地する。

当地は、人我胸川と鳩胸川の支流によって開析されたそれぞれの谷に挟まれた丘陵から人我胸川側の裾部の緩斜面であり、その前面(北西)に人我胸川に開析された谷が迫っている。丘陵の基盤は入戸火砕流(シラス)である。

遺跡から先土器時代では、AT上位でナイフ形石器文化に属する石器が検出され、また細石器文化に属する可能性のある細石核も検出された。縄文時代では、早期の集石遺構と剝片類を中心とした遺物が検出され、中期では春日式の系統と考えられる土器片を埋土に含む遺構が検出された。



第4図 地形断面図



第5図 遺跡周辺地形図(1:1500)

第3節 遺跡の層位と包含層 (第6図)

遺跡では、鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰をⅡ層、始良カルデラ起源の入戸火砕流をⅥ層として、6枚の土層が確認できた。以下、各層ごとに説明をしていく。

第Ⅰ層 表土層 (耕作土)

周辺遺跡で表土層の1枚下層に見られる黒色土層は、削平で全く残存していない。

第Ⅱ層 黄褐色土層

アカホヤ火山灰層である。この層は、周辺遺跡において、その土質の違いによってさらに2枚に分層できるが、当遺跡では、土壌化した二次的な堆積層と考えられる上層は、耕作等によりすでに完全に削平されており、非常に硬くしまった一次堆積層のみが調査区の全面に堆積している。無遺物層である。

第Ⅲ層 暗褐色土層

縄文時代早期の遺物包含層である。粒子は比較的細かく、やや粘性を帯びる。

第Ⅳ層 黒褐色土層

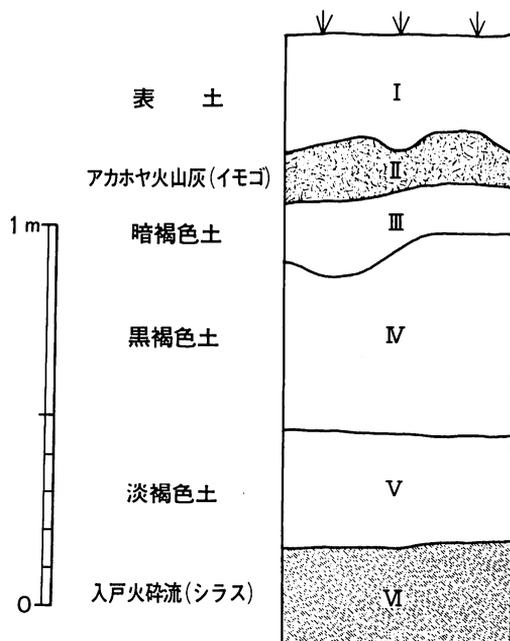
縄文時代早期及び細石器の遺物包含層である。土質はしまりがあり粘性を帯び、ガチガチに固まった黒色のブロックを多量に含む。早期の土器と細石核の出土が量的に乏しく、両者の層位的な分離は不可能である。

第Ⅴ層 褐色土層

この層は、シラスが土壌化して、二次的に堆積した層であると考えられ、わずかに粘性を帯びる。この層からは、旧石器時代の石器が検出された。

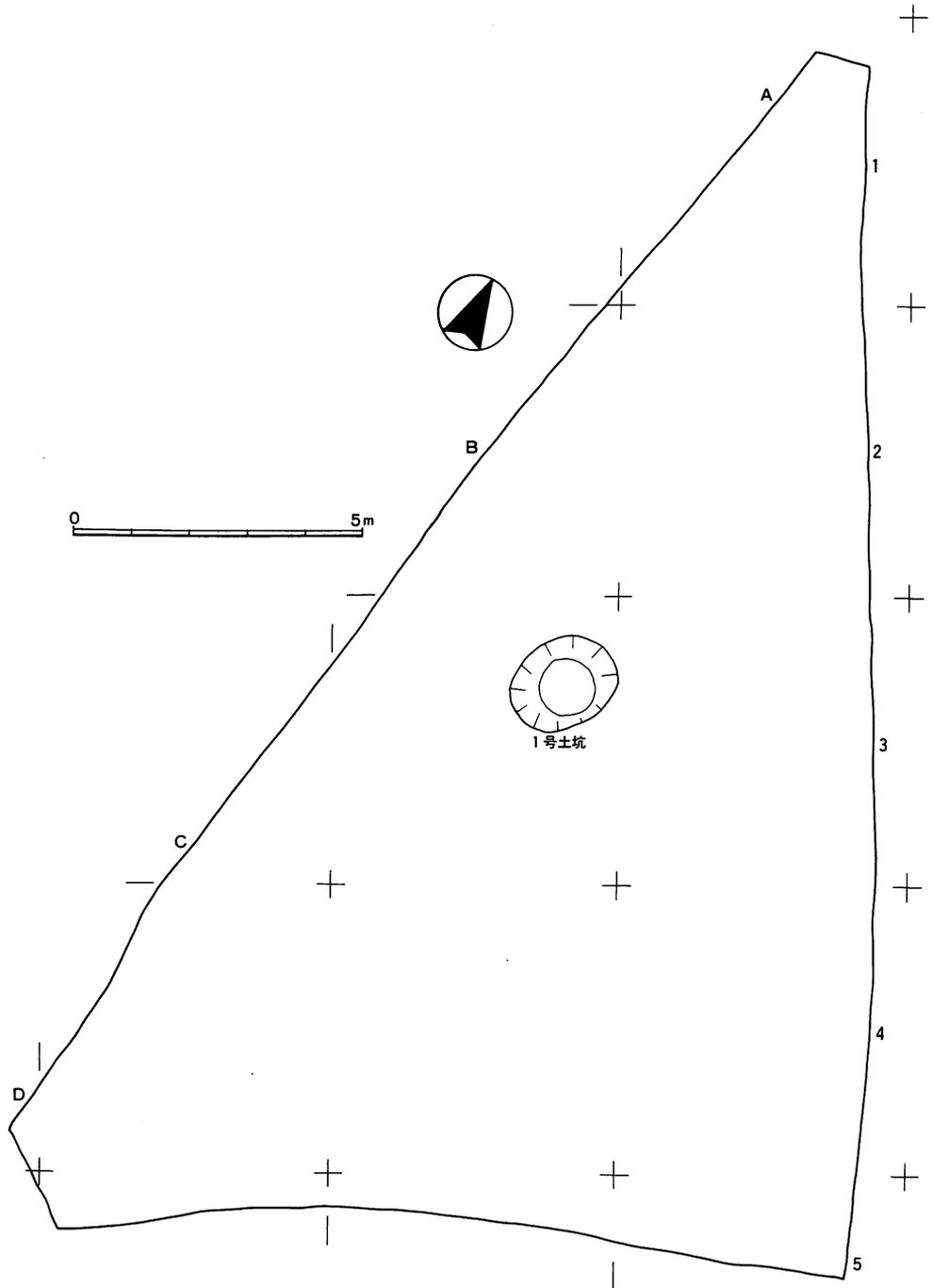
第Ⅵ層 黄色火山灰層

この層は、始良カルデラ起源の入戸火砕流(シラス)の二次堆積層で粒子が粗くザラザラしている。無遺物層である。



第6図 基本土層図

第三章 調査の成果



第7図 II層上面遺構分布図

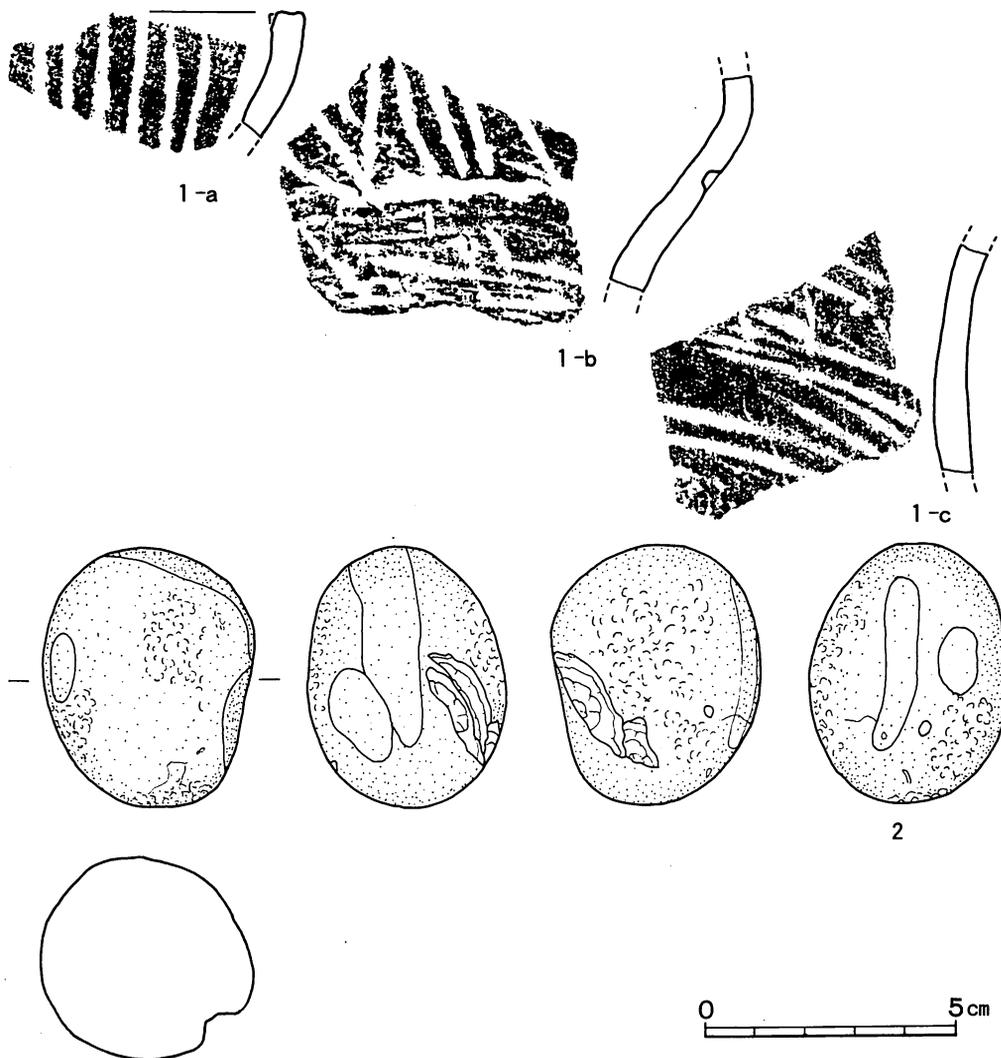
第1節 II層上面の調査

II層は黄褐色のアカホヤ火山灰層の一次堆積層である。この層の上面で遺構検出を行ったがA・B-3グリッドから、土杭1基を検出したのみであった。(第7図)

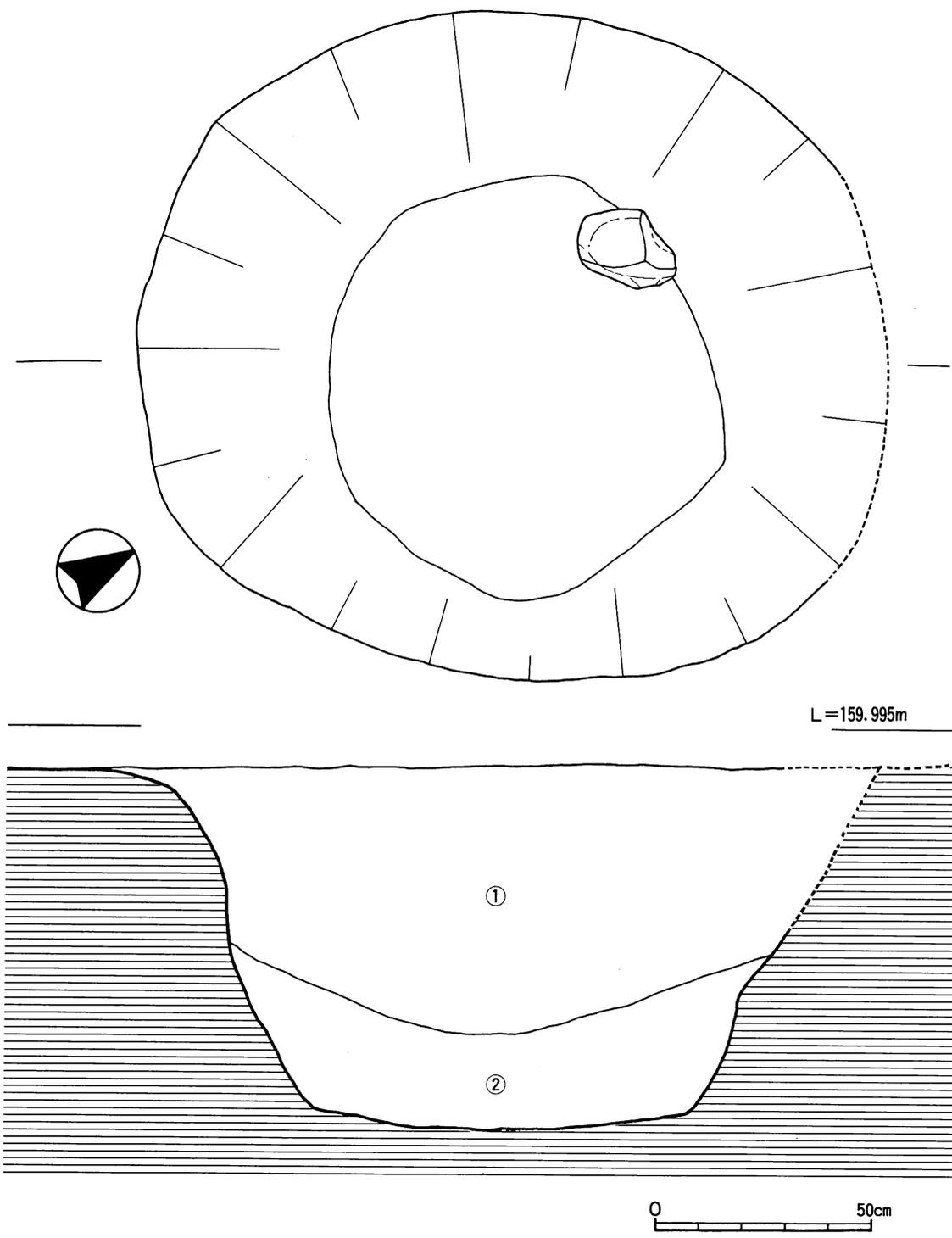
1. 1号土杭について

(1) 遺構について (第9図)

1号土杭の平面形態は、検出面ではやや方形気味の楕円形を呈し、長軸1.75m (攪乱のため推定)、短軸1.55mを測る。北側の一部は上層(耕作土)からの攪乱で破壊されている。土杭



第8図 1号土坑出土遺物実測図



第9图 1号土坑实测图

の基底面は円形状を呈し、長径0.97m、短径0.90mを測る。壁面には焼けていたりなどの特別な状況は観察できない。基底面北側に、20cm大の礫（安山岩）が出土したが、流れこみと考えられる。土杭の深さは、最深部で検出面から0.84mを測る。

土杭の埋土は、2つに分層できる。①層は黄褐色土層で、フカフカとしてしまりに欠ける。アカホヤ火山灰の土壌化したもので、わずかに炭化物を含む。②層は淡灰黄褐色土層で、やや粘性があり、わずかに炭化物を含むが、アカホヤ火山灰の土壌化したものが主体である。

（2）遺物について（第8図）

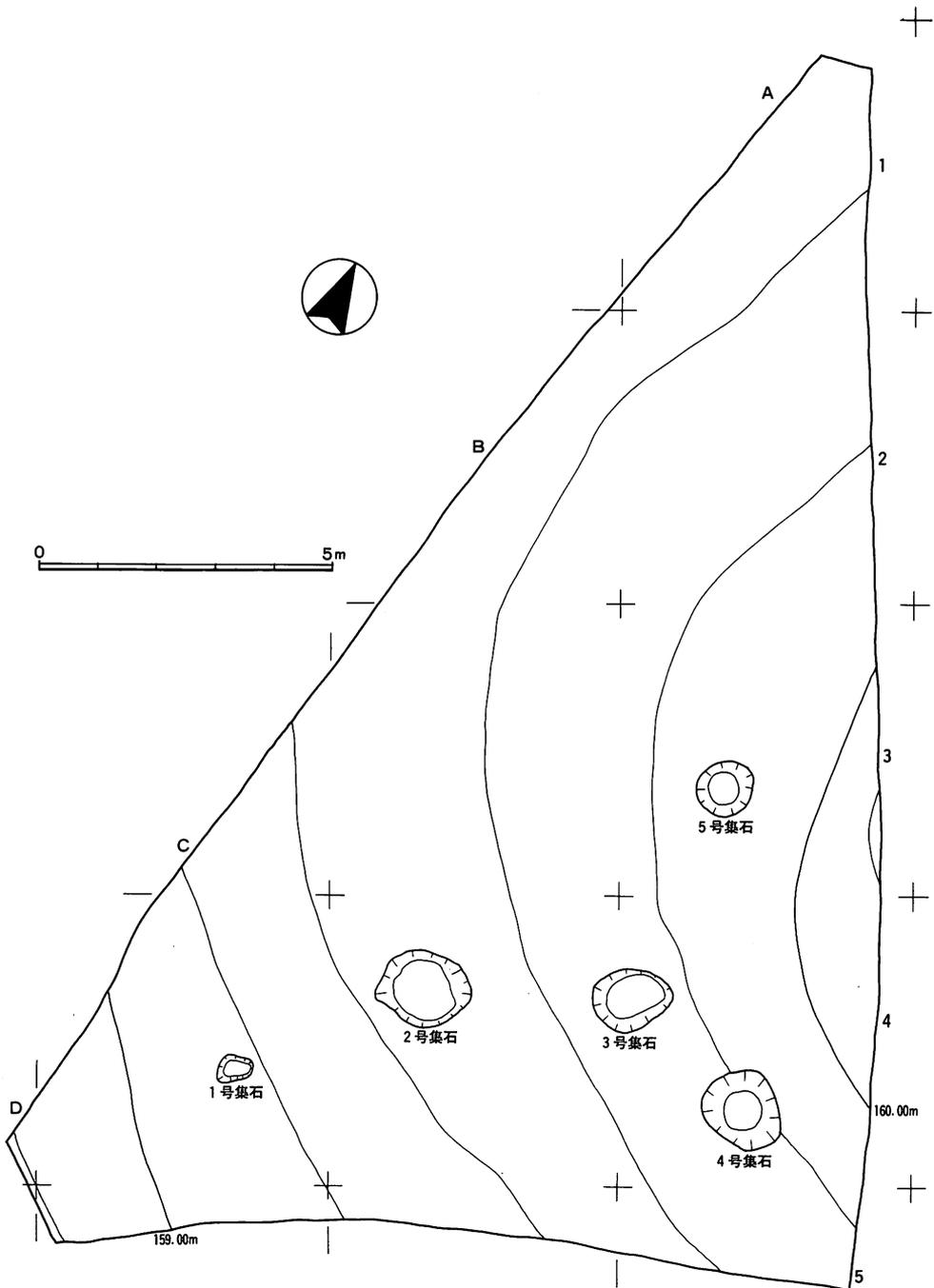
土杭の基底面直上で検出された遺物はなく、埋土から数点の土器片と石器1点が出土した。土器は形状の明らかなもののみ掲示しておく。

1a～1cは、直接接合はしないが、胎土や焼成から同一個体と思われるもので、春日式系の土器と考えられる。各々の土器片の屈曲状態と文様から、器形は口縁部が波状を示すキャリパー形と推定することができる。1aは口縁部、1bは口縁部直下、1cは口縁部下の屈曲部から胴部の膨らみの部分にかけてのものである。文様は、口縁部直下に棒状の施文具による平行沈線が、縦方向もしくは斜め方向に施され、その下に、管状の施文具による押し引き状の連続刺突が、横方向に施されている。調整は、内外両面ともに貝殻条痕が施された後、ナデ調整が行われている。特に、口縁部下の屈曲部を境に、内面では上部を、外面では下部を丁寧にナデている。

2は、石器の形状が円形を呈する小型の磨石・敲石である。敲打痕は表裏面にあり、磨痕は縁辺部の一部にある。石材は流紋岩である。長さ5.12cm、幅4.23cm、厚さ3.98cm、重さ117gを量る。

第2節 Ⅲ層の調査

Ⅲ層は暗褐色で、粒子が比較的細かくやや粘性を帯びた土層である。遺物は縄文時代早期の



第10図 Ⅳ層上面遺構分布図

石器が含まれ、この層からⅣ層に切り込んだ5基の集石遺構を検出することができた。

1. 遺構について (第10図)

5基の集石遺構は、Ⅳ層上面で検出された。5基とも調査区南側の、東北東から西南西に緩やかに傾斜する斜面に、比較的まとまって分布している。

(1) 1号集石 (第11図)

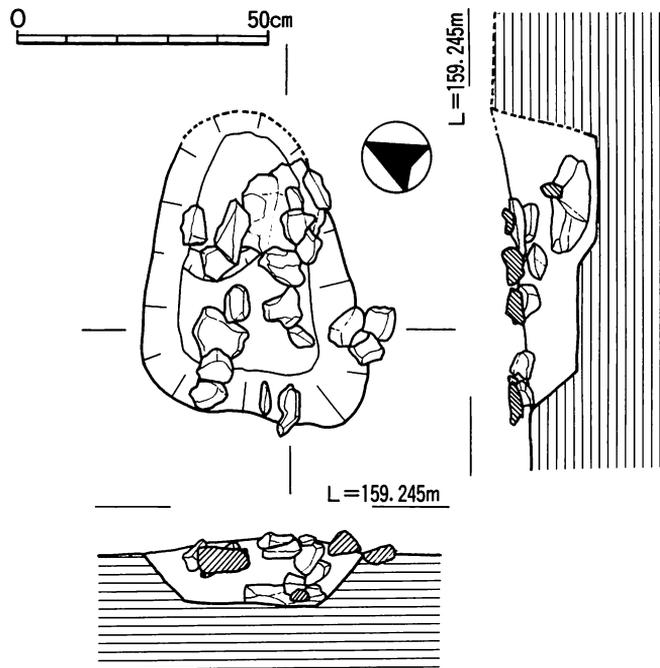
1号集石は、5基中最も高度の低い位置にある。掘り込みの東側の一部は、木の根による攪乱を受けている。集石は、20cm前後の比較的大きい石1個と、握り拳大の破碎礫によって構成され、一部の石は火を受け赤変しているのが確認できる。

礫の分布は、比較的上方に集中しており、基底面に密着しているものはない。

掘り込みの平面形態は、検出面では不整の楕円形を呈し、長軸0.60m (攪乱のため推定)、短軸0.40mを測る。また、掘り込みの深さは、検出面から最深部で0.20mを測り、他の4基と比べると規模を異にし極めて小さい。

基底面は、検出面と同様の形状を示し、長軸0.46m、短軸0.25mを測る。基底面のほぼ中央部に段があり、東側が西側より5cmほど低くなっている。

掘り込みの含土は、Ⅲ層の暗褐色土に少量の炭化物を含んだもので、Ⅲ層よりややしなりに欠ける。



第11図 1号集石実測図

(2) 2号集石 (第12・13図)

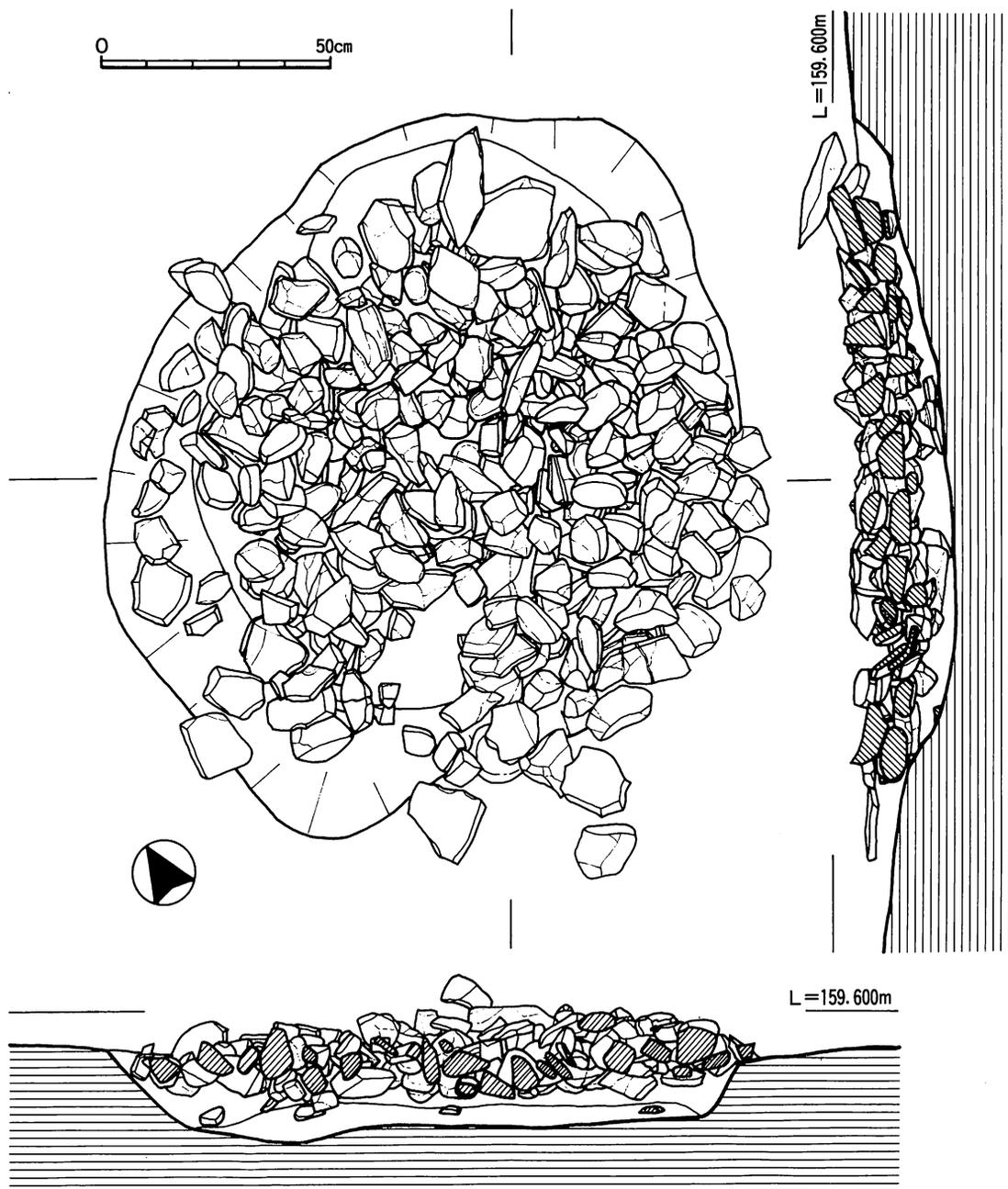
2号集石は、400個前後の破碎礫によって構成され、本遺跡では最も規模が大きい。礫の大きさは、5cm大から20cm大までであるが、主体となるのは拳大のものである。礫の大半は、火を受け赤変しているのが確認できる。

礫の平面分布は、正円に近い形で分布し、比較的大型の破碎礫が外側に位置しているような傾向が見られる。断面で見ると掘り込みの基底部付近はほとんど礫がなく、掘り込みの中位付近から上位にかけて集中し、びっしりと密着した状態で分布している。

掘り込みの平面形態は、検出面では不整の楕円形を呈し、長軸1.65m、短軸1.30mを測り、検出面からの深さは、最深部で0.20mを測る。

基底面の平面形態は、北西部に三日月状の中段があるため、検出面より円形に近い不整の楕円形を呈している。長軸1.10m、短軸1.00mを測り、中段との高低差は約5cmである。

掘り込みの含土は、基本的には1号集石の含土と同一であるが、炭化物の含有量が1号集石



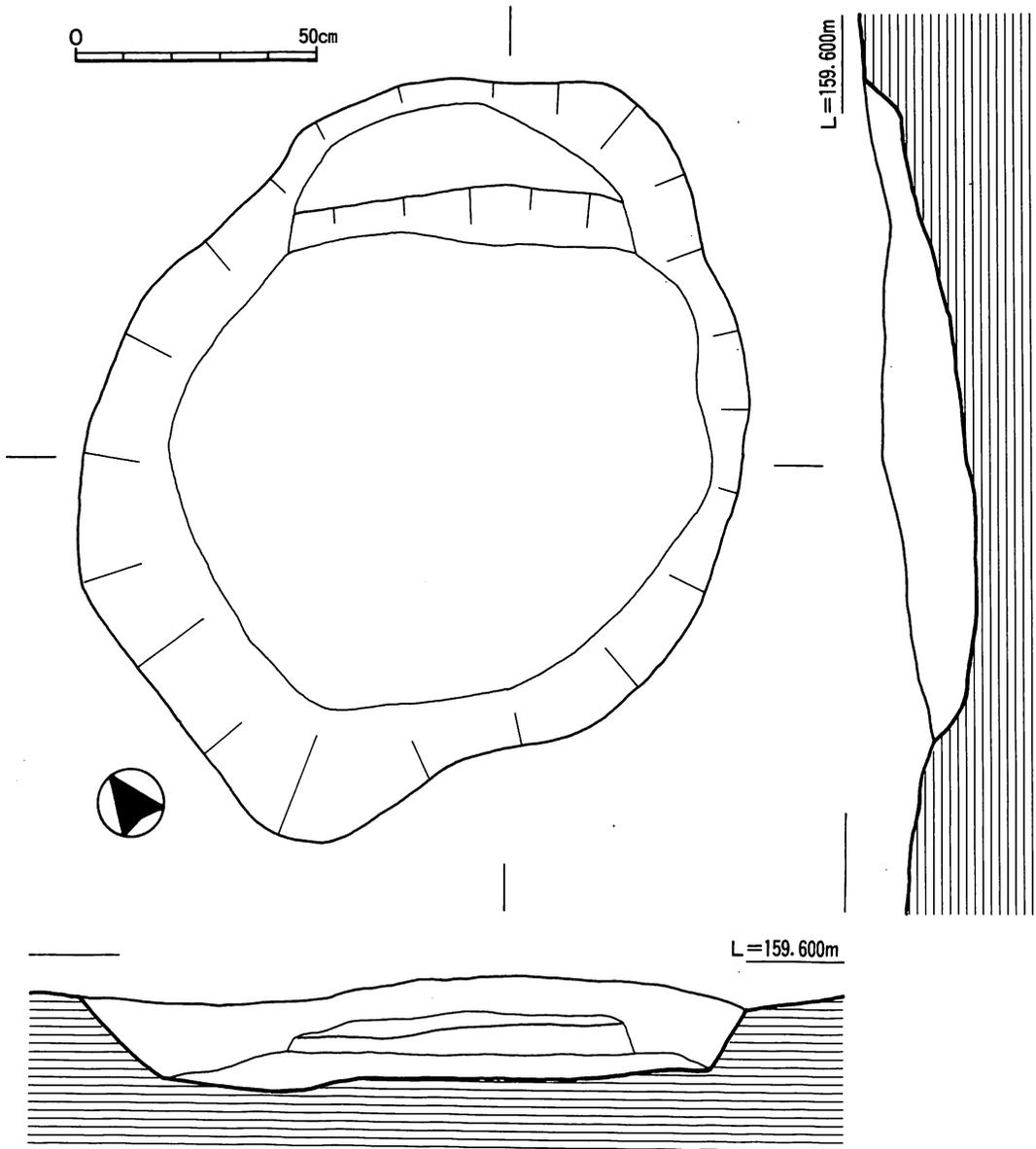
第12図 2号集石実測図

よりやや多い。層位は礫の密集のため、明確な分離は不可能であったが、礫の密集部に入り込んだ土は、礫の下層に比べるとしまりがなく、炭化物がやや多く含まれていた。

(3) 3号集石 (第14図)

3号集石は、拳大の大きさを中心として、5cm大から20cm大までの、80個前後の破碎礫によって構成され、礫の赤変については、掘り込み内の含土のため確認しづらいが、一部の礫が火を受けているのが、かろうじて確認できる。

礫の分布は、数個は基底面近くに位置するが、ほとんどが、掘り込みの基底部からかなり浮



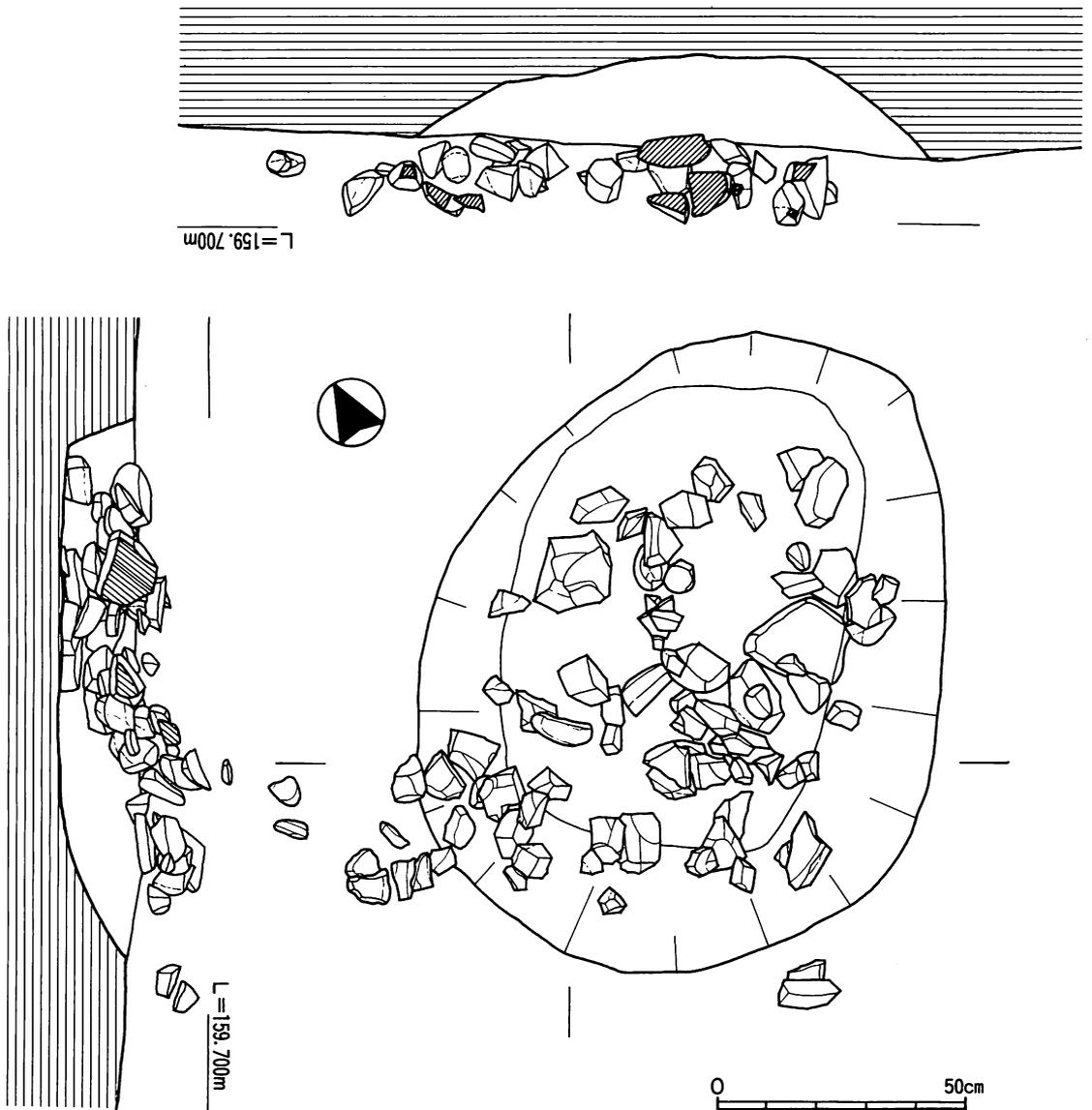
第13図 2号集石掘り込み実測図

いた位置に集中している。平面的な分布から見ると、比較的に散逸している。

掘り込みの平面形態は、検出面では、やや不整の卵形を呈し、長軸1.35m、短軸1.05mを測る。また、掘り込みの深さは、最深部で検出面から0.20mを測る。

基底面は、角が丸みがあった長形状を呈し、長片0.95m、短片0.65mを測る。北側の一部だけが、掘り込みの角度が急になっている。

含土は、炭化物が土壌化したようなきめの細かい黒色土に、Ⅲ層の暗褐色土がブロック状に少量含まれ、炭化物の含有量が、Ⅲ層が含土の大半を占める集石と比較して、かなり多量に含



第14図 3号集石実測図

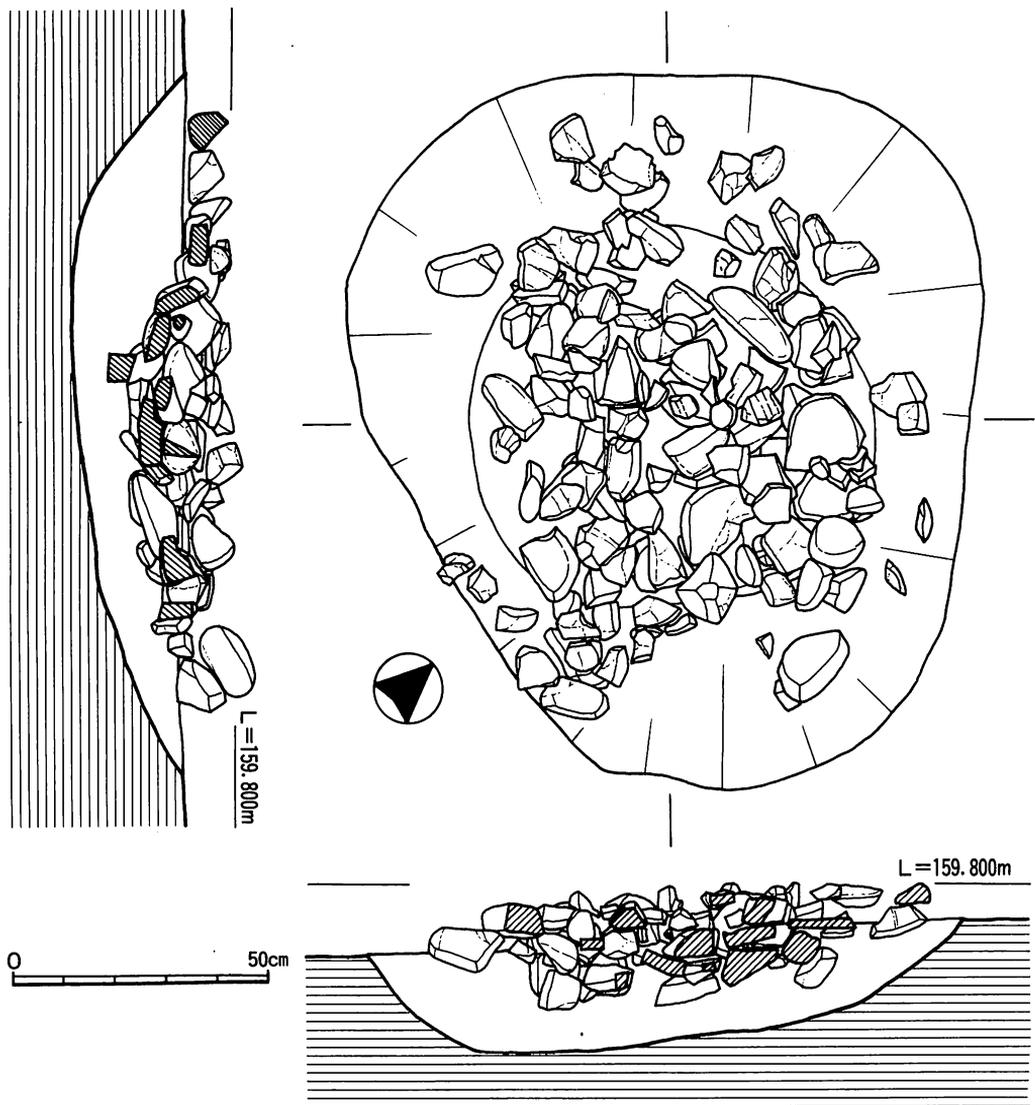
まれる。

(4) 4号集石 (第15図)

4号集石は、拳大の大きさを中心として、5cm～20cm大の破碎礫百数十個で構成され、過半数の礫が火を受け赤変しているのが確認できる。

礫の分布は、平面では掘り込みの中心部付近に集中し、垂直分布を見ると、中心部に多く周辺部に少なく、レンズ状に掘り込みの断面ラインに沿うように分布している。

掘り込みの平面形態は、不整の卵形あるいは梨形を呈し、長軸1.40m、短軸1.20mを測る。また、深さは検出面から、最深部で0.23mを測る。



第15図 4号集石実測図

基底面はやや不整の円形を呈し、長軸0.80m、短軸0.75mを測る。

含土は1号・2号と同様に、Ⅲ層の暗褐色土に少量の炭化物を含んだものである。

(5) 5号集石 (第15図)

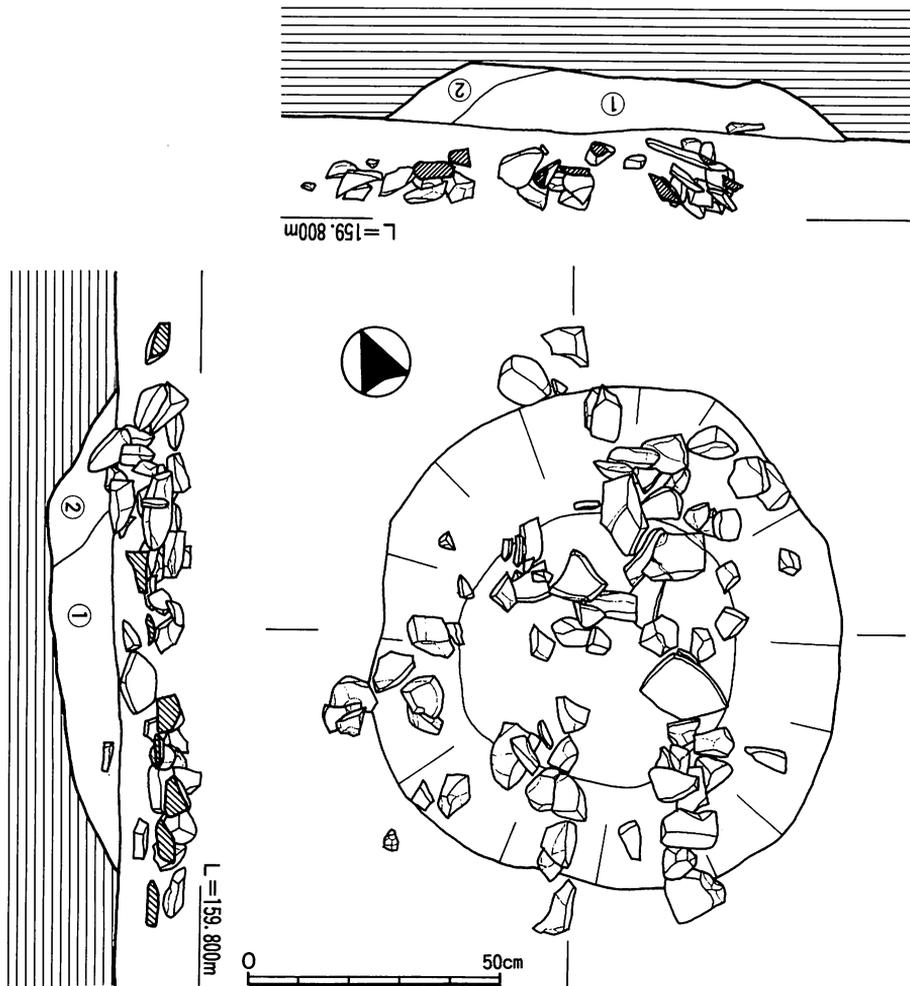
5号集石は、拳大の大きさを中心として、5cm大から15cm大までの60個前後の破碎礫によって構成され、半数の礫が火を受け赤変しているのが確認できる。

礫の分布は、平面ではやや散逸しており、垂直分布を見ると掘り込みの埋土に含まれる礫はほとんどなく、上位に集中するが、掘り込みの立ち上がりの延長線の内側に、すべて納まる。

掘り込みの平面形態は、やや不整の楕円形を呈し、長軸1.00m、短軸0.90mを測る。また、掘り込みの深さは、検出面から最深部で0.13mを測る。

基底面は、直径0.55mのやや不整気味の円形を呈し、北側がわずかに深くなっている。

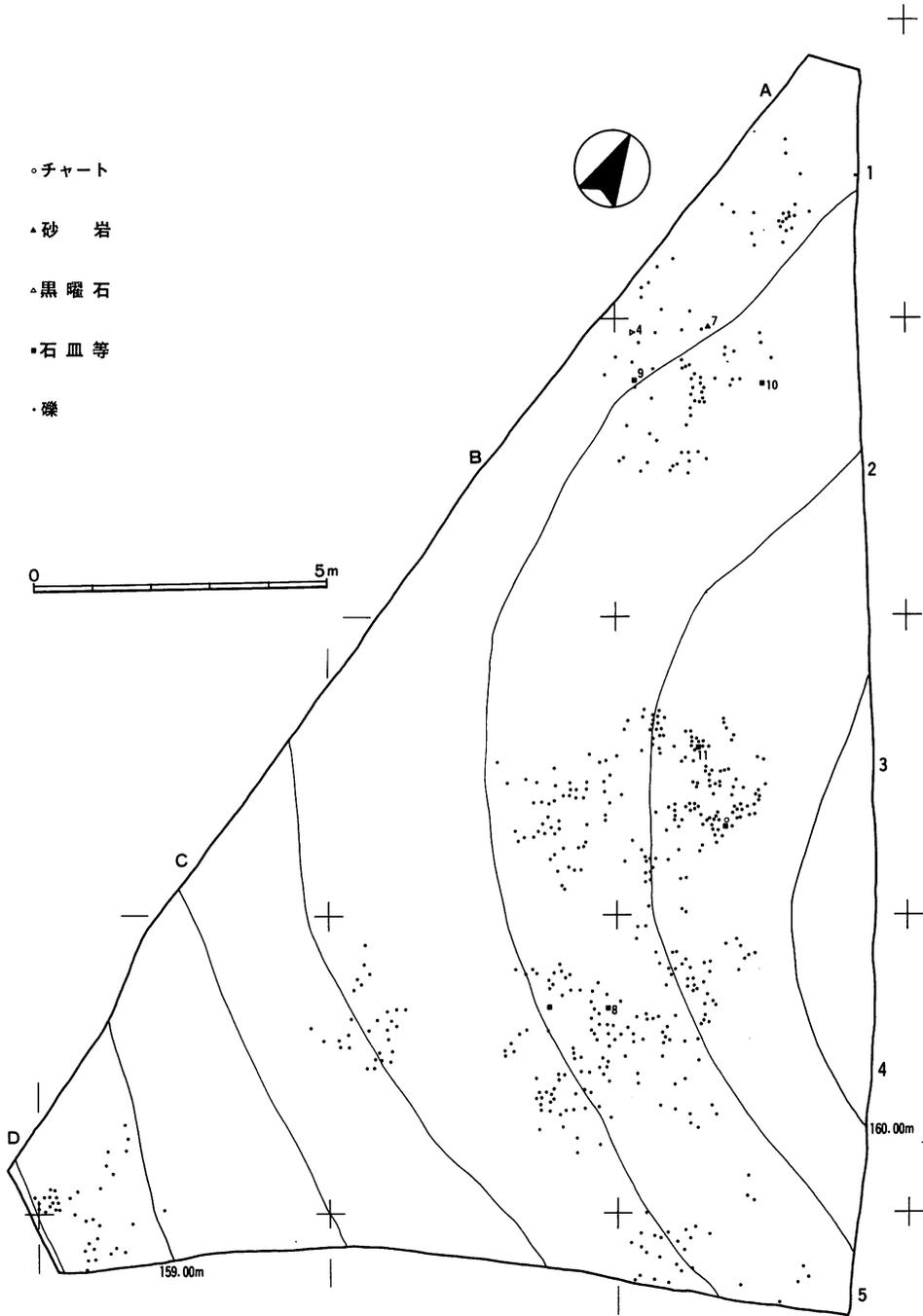
含土は2層に分離され、①層は暗黒褐色土で、やわらかくしまりに欠け、炭化物を粒子状に



第16図 5号集石実測図

少量含む。②層は①に暗褐色土が少量混じったもので、ややしまりがある。

2. Ⅲ層出土の遺物 (第17図・18図・19図)



第17図 Ⅲ層遺物・礫分布図

Ⅲ層の暗褐色土層の層厚は10～20cmで、調査区南側が若干堆積が厚い。

層中に含まれる破碎礫は、火を受けて赤変したものが多い。グリッド3列から南側については、大まかに5ヵ所ほどのまとまりが見られる。このまとまりを第10図の集石の分布と比較してみると、礫のまとまりと集石の分布が一致または近接するため、集石にかかわる礫であると思われる。北側の礫については、調査区外の遺構とかかわる可能性がある。遺物も、この礫のまとまりの中で検出されている。

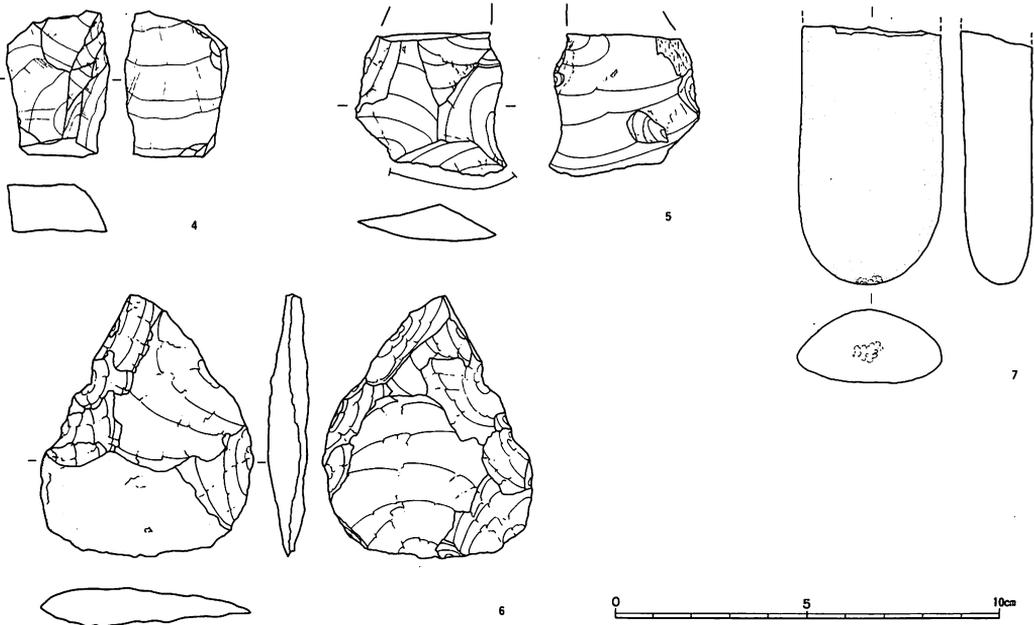
4は、黒曜石製の石核である。右側縁に剝離面が認められるが、打点がみられないので、石核が欠損したものである。残存部で長さ3.82cm、幅2.69cm、厚さ1.25cmを測り、重さ19gを量る。

5は、Ⅲ層一括資料で、使用痕のあるチャートの横長剝片で、先端部に微細な剝離が観察される。長さ3.27cm、幅3.97cm、厚さ0.94cmを測り、重さ14gを量る。

6もⅢ層一括資料で、粘板岩製の削器で洋梨形をしている。刃部は右側縁から先端部にかけて荒く作られている。長さ6.91cm、幅5.57cm、厚さ1.05cmを測り、重さ32gを量る。

7は、棒状の敲石で、一端は折れて欠損し、残った一端に敲打痕がみられる。砂岩製で、残存部の長さ6.78cm、幅3.77cm、厚さ1.65cmを測り、重さ78gを量る。

8は、不整形をなす磨石・敲石の欠損品である。凝灰岩製である。側縁部のうち、曲線をなすところに敲打痕が観察され、欠損後、熱による赤変をしている。残存部で長さ9.83cm、幅7.73cm、厚さ2.83cmを測り、重さ290gを量る。



第18図 石器実測図（Ⅲ層）

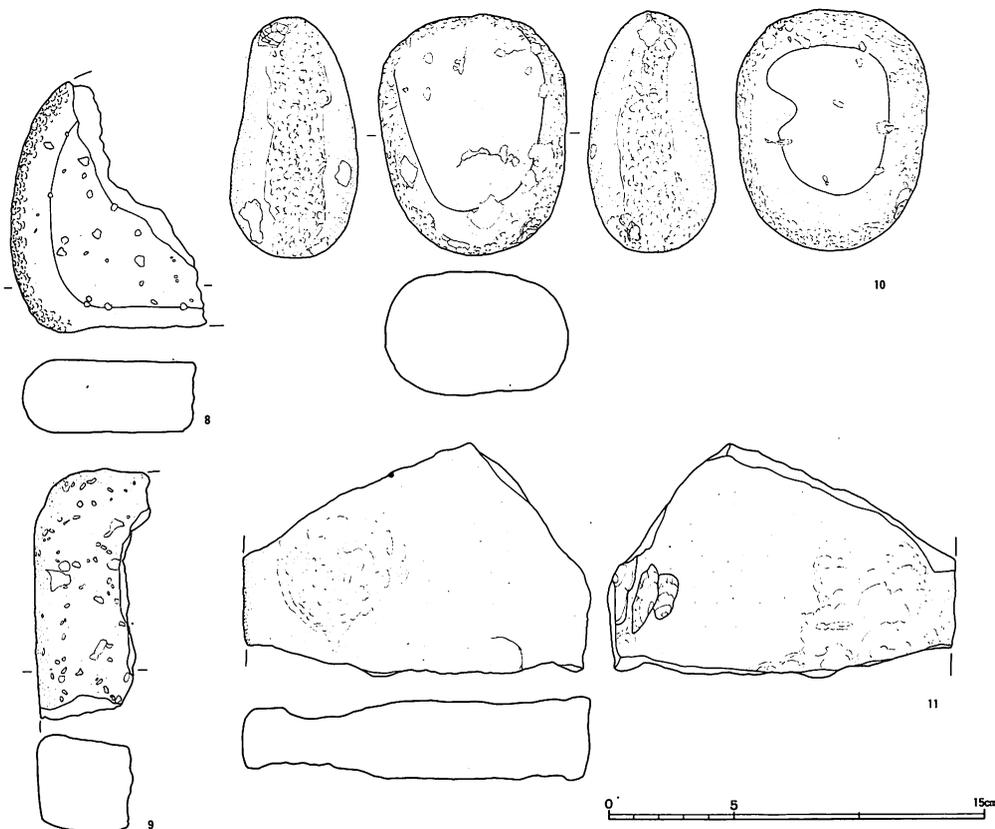
9は、凝灰岩製の石皿の欠損品で、敲打等を加えて整形が行なわれている。作業面は1面で浅く窪んでいる。残存部で長さ9.88cm、幅4.67cm、厚さ3.90cmを測り、重さ240gを量る。

10は、不整形の磨石・敲石での欠損品で、凝灰岩製である。縁辺の全域に敲打痕が観察される。また表裏とも顕著な摩痕が観察される。残存部で長さ9.42cm、幅7.64cm、厚さ5.11cmを測り、重さ410gを量る。

11は、凝灰岩製の凹石・石皿で欠損品である。石器の作業面は表裏2面で、窪みは表裏両面の側縁部に近いところに作られている。残存部で、長さ13.87cm、幅9.22cm、厚さ3.27cmを測り、重さ650gを量る。

第3表 Ⅲ層石器計測表

No	器種	石材	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
4	核 使用痕のある剥片 石器 磨石 磨石 磨石 磨石 磨石 磨石 磨石 磨石 磨石 磨石	黒曜石 チャート 粘板岩 砂岩 凝灰岩 " " " " " " "	3.82	2.69	1.25	19	4 Ⅲ層一括 " 5 22 8 7 12
5			(3.27)	3.97	0.94	14	
6			6.91	5.57	1.05	32	
7			6.78	3.77	1.65	78	
8			(9.83)	(7.73)	2.83	290	
9			(9.88)	(4.67)	3.90	240	
10			9.42	7.64	5.11	410	
11			(13.87)	(9.22)	3.27	650	



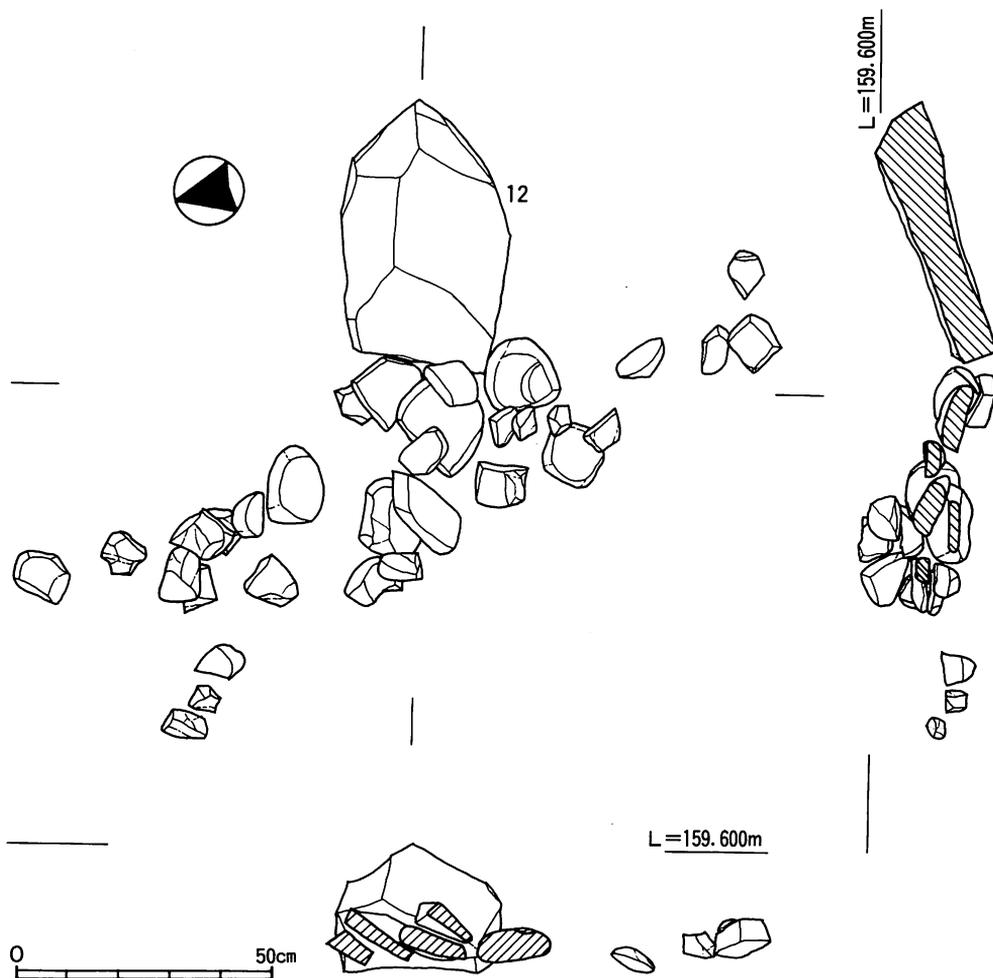
第19図 石器実測図(Ⅲ層)

第3節 IV層の調査

IV層は遺跡の層位で前述したように黒褐色土層で、しまりがあり粘性を帯びる土質である。遺物は縄文時代早期の土器、石器、および石核などが検出された。遺構は掘り込みをもたない集石2基を検出した。

1. 遺構について

前述したように、遺構は掘り込みをもたない集石2基を検出したが、第23図に示したようにIV層中には大量の破碎礫が含まれており、偶発的に集中している可能性も考えられ、積極的に集石遺構と断言できる調査成果はないが、一応ここでは集石遺構として報告しておく。



第20図 6号集石実測図

(1) 6号集石 (第20図)

①遺構について

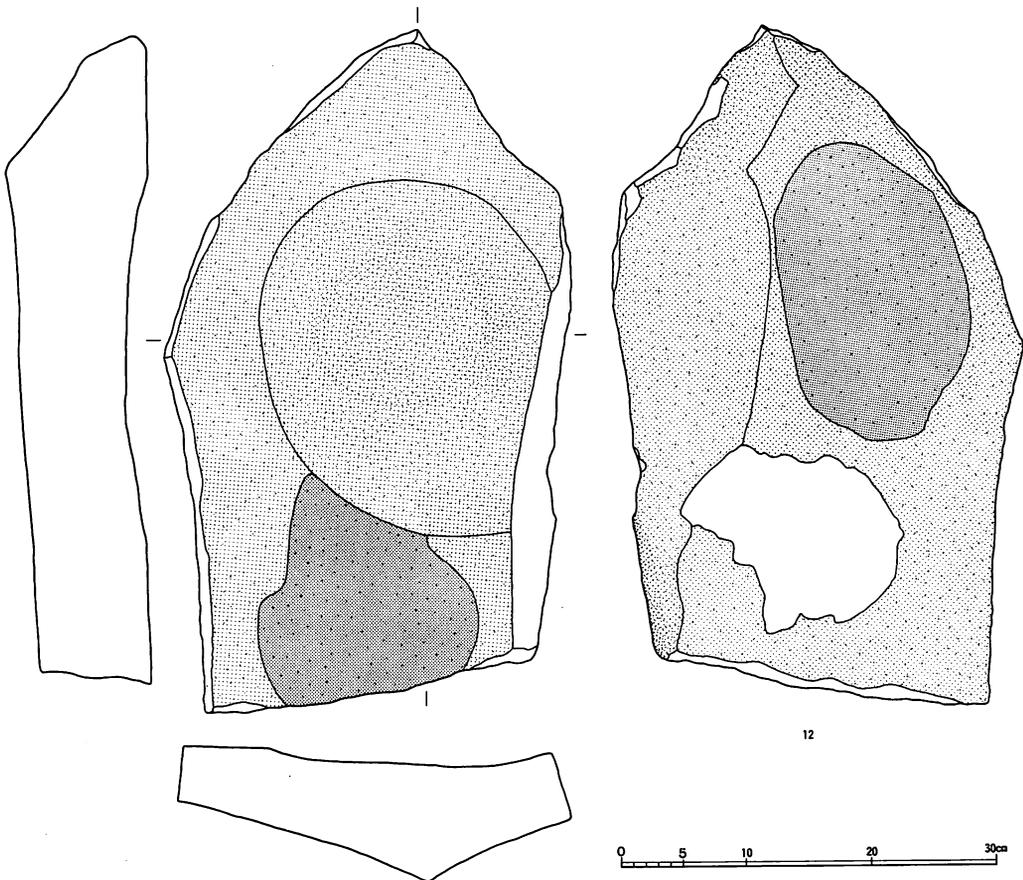
6号集石は、破碎礫が比較的まとまって分布している箇所にある。石皿1個(第21図)に32個の破碎礫で構成され、破碎礫は約半数が火を受け赤変しているのが確認できる。

礫の分布は、平面では石皿が窪んだ面を下にして、東から西に傾いた状態で、最も東側に検出され、その西側に破碎礫が南北に帯状気味に検出された。分布範囲は、長軸約1.60m、短軸約0.80mの楕円形の中におさまる状態である。垂直分布は、中心部がレンズ状に落ち込む状態ではなく、端部も中心部もほぼ同じレベルの、直線的な分布状態である。

②遺物について

石皿(第21図)は、大型の安山岩製である。大きさは、長さ53.4cm、幅34.5cm、厚さは最大厚で11.4cmを測り、重量は23.0kgである。作業面は表裏面に及び、また、両面共によく使用され滑らかな状態になっている。

表面は中央部分に楕円の浅い窪み(約1cm)が見られ、その手前の広い平坦部によく使用さ



第21図 石器実測図(6号集石)

れた部分が観察される。

裏面は、最も広い部分に、楕円状によく使用された部分が観察される。この下部に欠損した部分があり、それを避けるように特に使用された範囲があるので、当初から欠損していたものと考えられる。(スクリーントーンの範囲が使用された部分で、密な部分が特に使用された範囲)

また、火を受けた痕跡は観察できなかった。(遺物登録番号 6 号集石 No 1)

(2) 7号集石 (第22図)

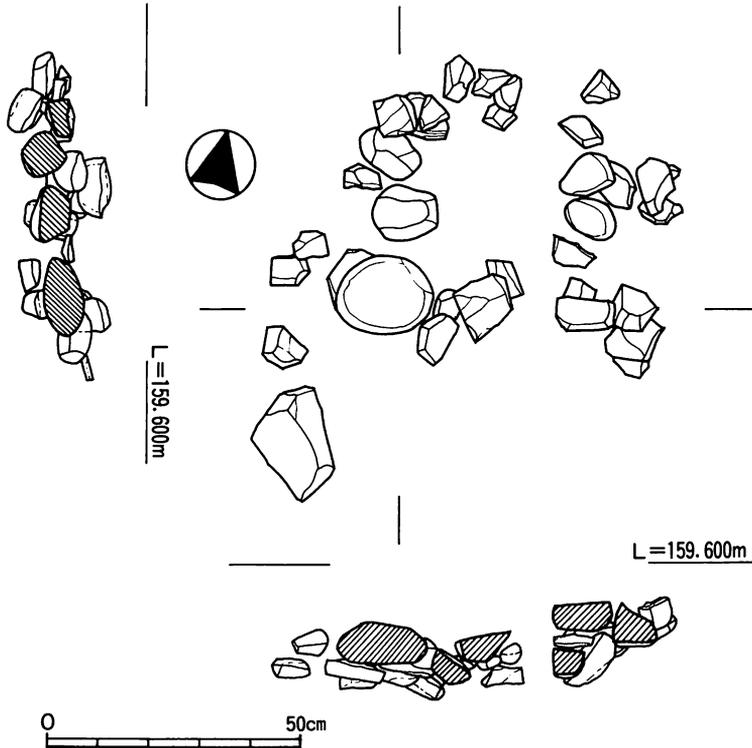
7号集石は、拳大のものを主体とした、5cmから20cm大の34個の破碎礫及び円礫で構成されている。

礫の過半数は、火を受けて赤変しているのが確認できる。

平面的な分布については、直径約0.60mの円形の範囲内におさまり、やや散逸気味で中心部や端部に極端に集中した分布は見られない。

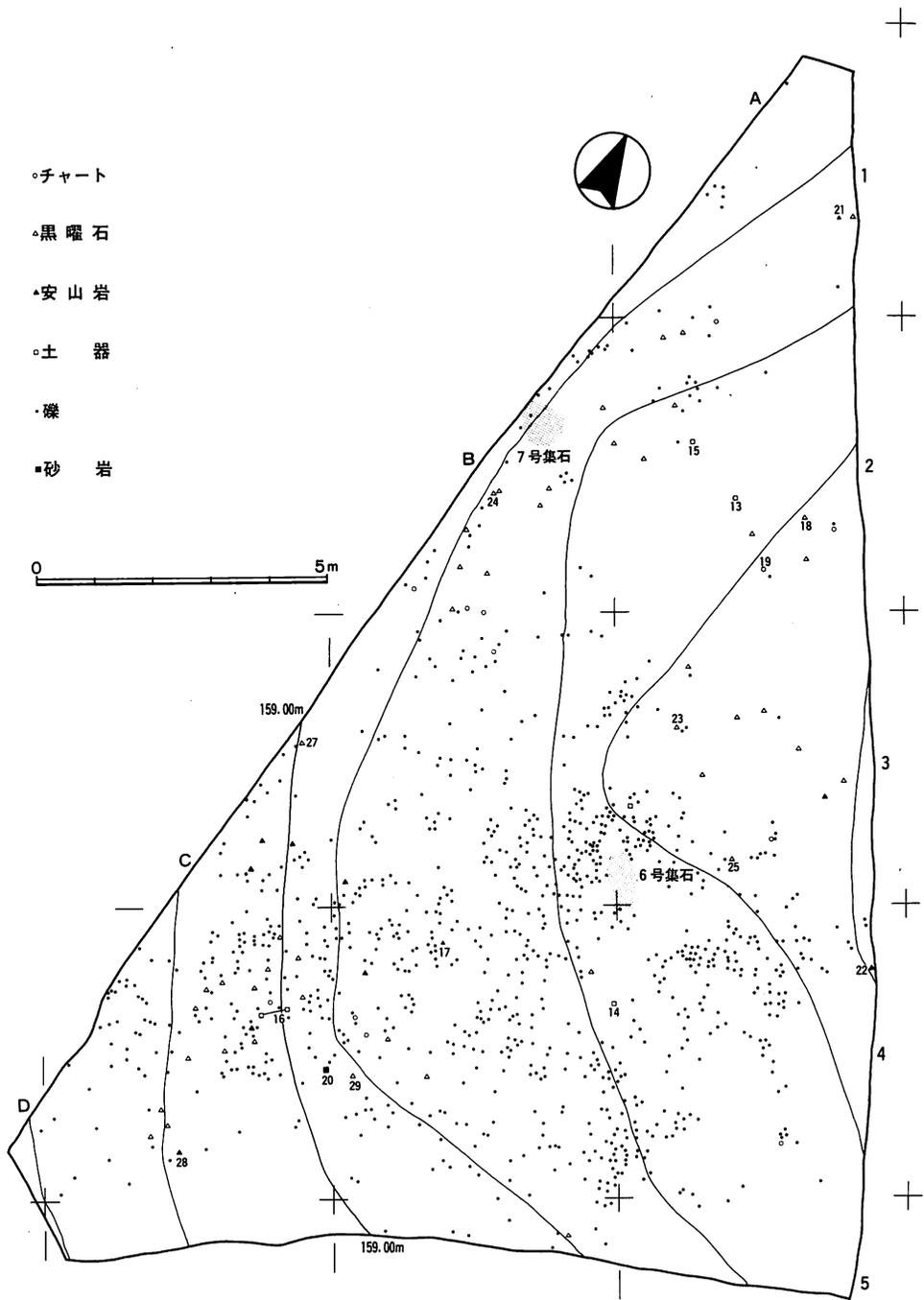
垂直分布ををみると礫の上位のものと下位のものの高低差は、最大で約15cmあり、中心部にある礫が、端部のものよりやや下位に位置している傾向がうかがえる。

礫の基底部ラインをたどると、薄い凸レンズ状になる。したがって、掘り込みが存在した可能性が強いが、遺構の基盤となる土と埋土は、区別がつかず確認できなかった。したがって、



第22図 7号集石実測図

仮に掘り込みが存在したとしても、上層からの掘り込みではなく、IV層中で掘られた遺構であろう。



第23図 IV層集石・遺物・礫分布図

2 IV層出土の遺物（第23図・24図・25図・26図・27図）

第23図はV層上面の地形図に、遺物と礫の分布を示したものである。礫（ほとんどが破碎礫で、6～7割が火を受け赤変している）の分布は、調査区のほぼ全域にわたるが、南側にやや集中する傾向にある。

遺物の分布については、土器、石器（材料別）に分けて表示している。分布の有り様からは特にあげられるような傾向等はないが、土器片の出土量が4点で、極端に少ない検出結果となっている。

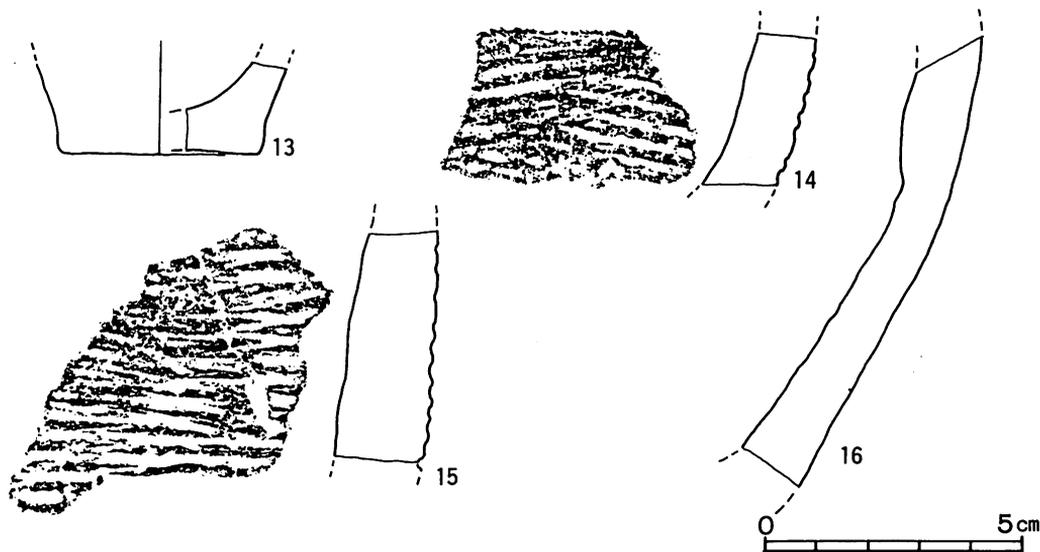
（1）土器について（第24図）

上述したように、土器片の検出量は4点のみであった。

13は底部片で、復元底部径は4.10cmを測る。（底部の $\frac{1}{3}$ 残存）底はやや上げ底気味を呈しやや丸みを持ちながら上方に立ち上がり、胴部は外上方に開いている。尖底土器の底部をカットしたような雰囲気がある。外面には、細く浅い貝殻条痕と思われる調整が、部分的に観察できる。内面は、残存部が少ないためよく分からない。色調は内外面とも明褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は、よくしまり1～3mm大の砂粒を少量含んでいる。（遺物登録番号No41）

14は胴部片で、比較的底部に近い部分であると思われる。外面はやや粗目の貝殻条痕が観察される。焼成は良好で、外面は明褐色を呈し、内面は炭素を吸着したように、黒色を呈している。胎土はよくしまり、2～4mm大の赤色粒子を少量含んでいる。（遺物登録番号No129）

15も胴部片で、底部に近い部分であると思われる。外面は14と同様にやや粗い貝殻条痕が観察される。焼成は良好で、外面は明褐色、内面はやや炭素を吸着したように黒味を帯びた明褐色



第24図 土器実測図（IV層）

を呈している。(遺物登録番号No42)

16も胴部片で、比較的底部に近い部分であろうと思われ、上部でやや内傾気味になる。文様はなく、内外面と明褐色を呈し、焼成は良好である。胎土はよくしまり、1～3mm大の砂粒を少量含む。(遺物登録番号No68・71)

(2) 石器について (第25図・26図・27図)

石器は、使用痕のある剥片、石鏃、石核、細石核が検出された。細石核と土器も含めた他の遺物の出土状況からは、層位的な分離は不可能であった。

①使用痕のある剥片 (第25図)

使用痕のある剥片は、5点検出された。

17は、砂岩質の円礫から取った横長の剥片で、先端部の自然面と剥離面が構成する鋭角な部分に、微細な使用痕が観察される。大きさは、長さ7.43cm、幅2.11cm、厚さ1.19cmを測り、重さは15gを量る。

18は、黒曜石の横長剥片で、その左側縁部に、微細な剥離が擦痕とともに観察される。大きさは、長さ4.97cm、幅6.43cm、厚さ1.65cmを測り、重さは44gを量る。

19は、幅広で先細りのチャートの縦長剥片が利用されているもので、左側縁部に使用痕と考えられる微細な剥離が残されている。剥片の打面は、単剥離面である。打点は2点あり、第1打を失敗したあと、打点を右へ1cmずらしての2打目で剥離している。大きさは、長さ7.23cm、幅4.41cm、厚さ1.07cmを測り、重さは27gを量る。

20は、砂岩の縦長剥片で、左側縁部に微細な剥離が観察される。剥片の打面は、単剥離面である。大きさは、長さ7.20cm、幅3.52cm、厚さ0.85cmを測り、重さは22gを量る。

21は、粘板岩の縦長剥片で、右側縁部に使用痕と思われる微細な剥離が見られる。大きさは、長さ8.32cm、幅6.33cm、厚さ1.25cmを測り、重さは14gを量る。

②石鏃 (第26図22)

出土層位が明確な石鏃は、IV層の1点のみであった。

22は、安山岩製の二等辺三角形を呈する凹基(浅い抉り)の石鏃である。大きさは、長さ2.59cm、幅2.00cm、厚さ0.42cmを測り、重さは2gを量る。

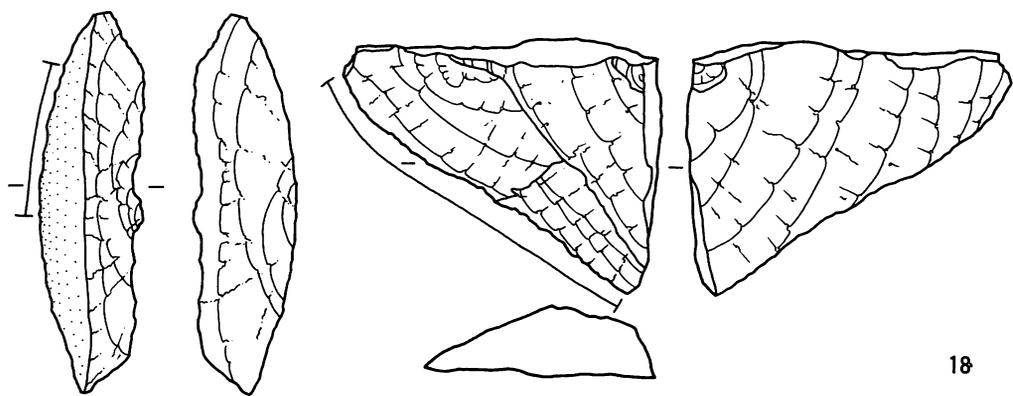
③石核 (第26図24・第27図28)

24は黒曜石の石核で、打面転移が頻繁に行われているが、その転移方法には、ほとんど規則性を見出せない。大きさは、長さ4.35cm、幅3.24cm、厚さ2.43cmを測り、重さは32gを量る。

28は、頁岩の石核で、打面の転移について規則性は見られない。大きさは、長さ3.60cm、幅5.19cm、厚さ2.32cmを測り、重さは29gを量る。

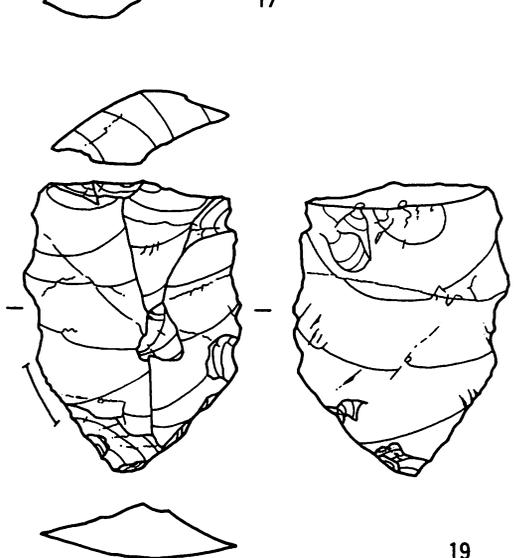
④削器 (第27図27・29)

27は、黒曜石の、原面打面の横長の剥片を利用した削器である。先端部右側 $\frac{1}{2}$ に打撃時の割

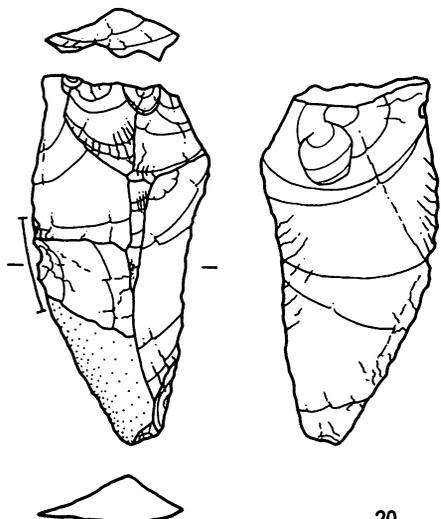


17

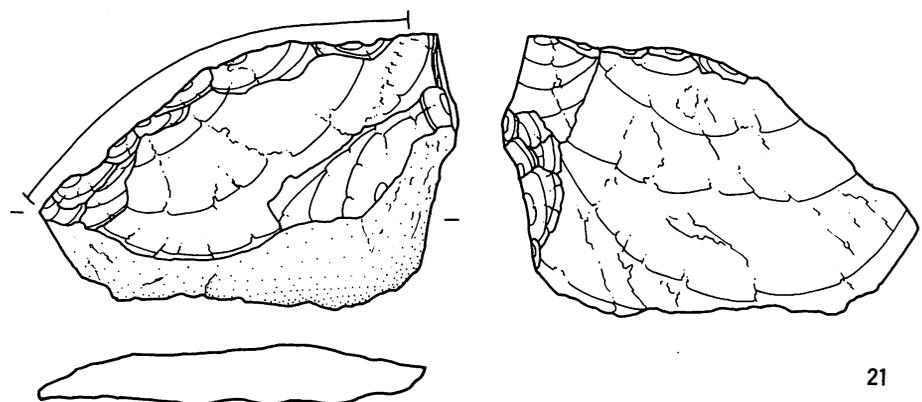
18



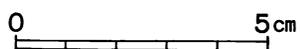
19



20



21



第25図 石器実測図 (IV層)

れが下から上に生じ、先端縁部を欠く。剥片の先端部には波状面を形成している。また、1枚の先行剥離面からなる背面に、浅い打撃角度のリタッチが見られる。裏面（主剥離面）に見られるリタッチはノッチを作りだして、打撃角度はやや高い。

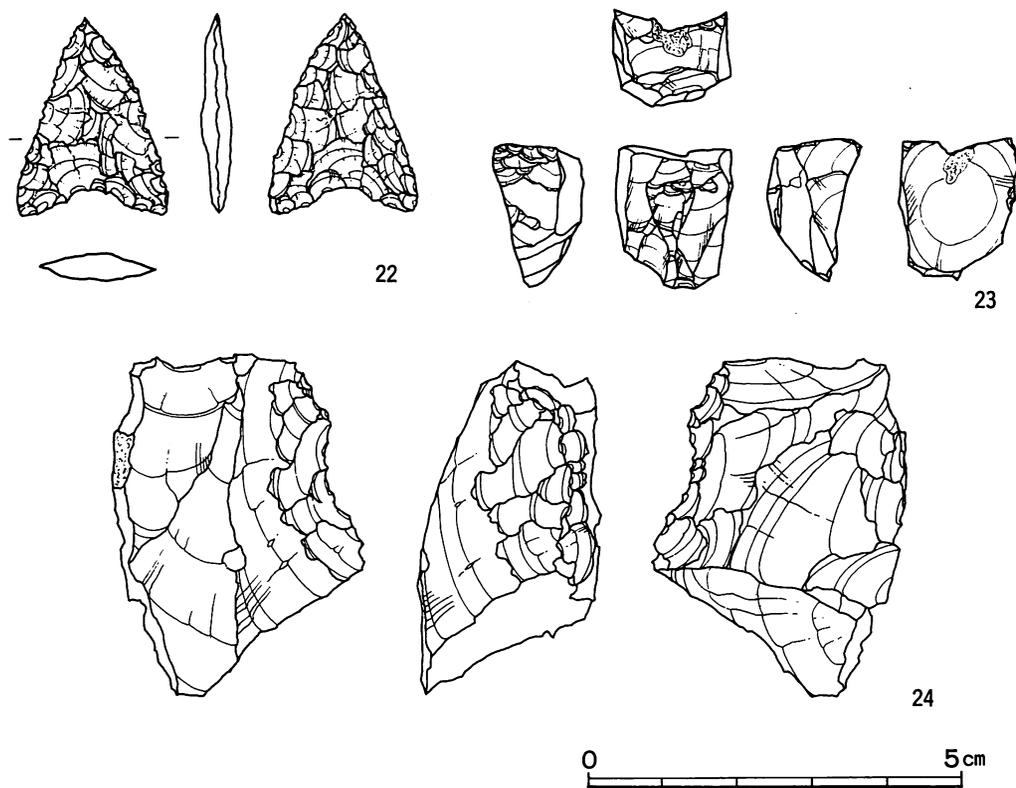
自然石の稜をそのまま打点に利用し、稜に沿って打撃を後退させることにより、蒲鋒を切るように連続的に剥離している。大きさは、長さ2.51cm、幅2.00cm、厚さ0.91cmを測り、重さは29gを量る。

29は、黒曜石の削器で、縦長の厚みのある剥片の中央部あたりで、上から下に折れたものを素材とし、折れ面部から両縁部に削器刃部を作りだすリタッチが施され、左端先端に主剥離面からの打撃で、大きなノッチが作られている。大きさは、長さ3.7cm、幅3.22cm、厚さ1.27cmを測り、重さは14gを量る。

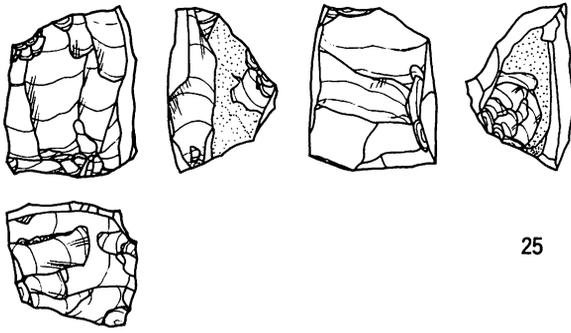
⑤細石核（第26図23・第27図25・26）

23は、黒曜石の細石核の破片である。原材の表面近くの不純物のために、細石核に強い打撃が加えられた際に、打撃箇所とは関係のないところで割れてできたものである。

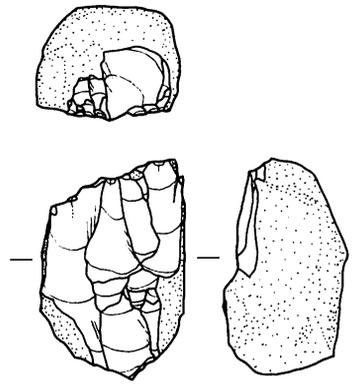
25は、黒曜石の細石核で、両側面に打面があるので、原材は小さな亜角礫だと思われる。打面は、両設打面の平行でない大きな剥離面2枚で構成され、上位では正面からの剥離、下位で



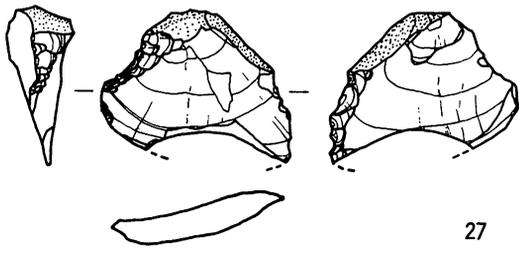
第26図 石器実測図（IV層）



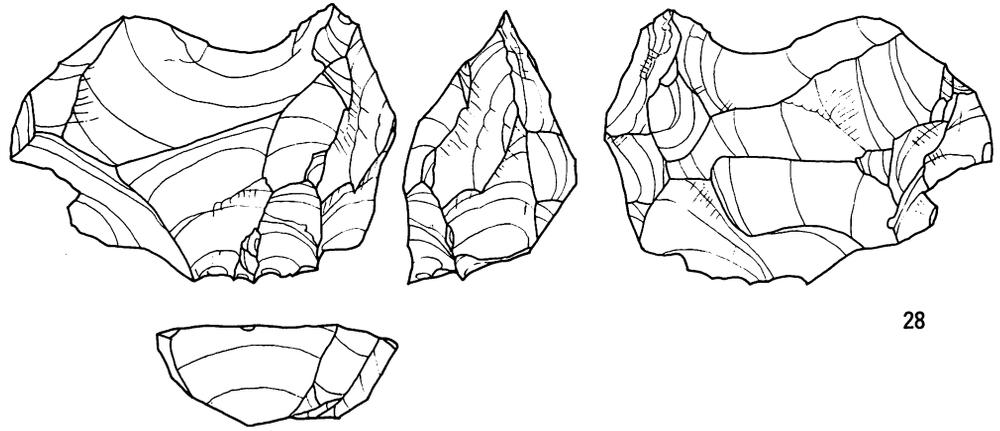
25



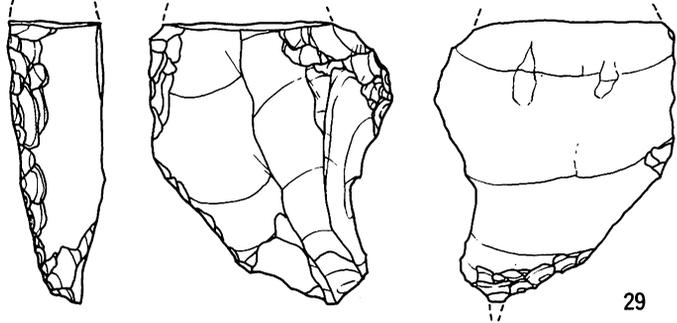
26



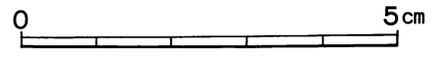
27



28



29



第27图 石器实测图 (IV層)

は側面方向からの剥離で、各々作りだされている。大きさは、長さ2.25cm、幅1.69、厚さ1.44cmを測り、重さは6gを量る。

26は、極めて小さい黒曜石の原材を用いた細石核である。打面の作成は、原材の制約により原材を大きく取り込まないように行っている。すでに取り除かれた細石刃は4～5本と推定される。また、右側は先行不完全石刃剥離のために残った下端の瘤のため、意図した長さを取りきれていない。左側は、2条の先行剥離の残した面が平坦すぎ、続いて意図する細石刃の長さが取れる保障がないため作業を終えている。大きさは、長さ2.82cm、幅1.91cm、厚さ1.45cmを測り、重さは9gを量る。

第4表 IV層石器計測表

No	器種	石材	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
17	使用痕のある剥片	砂岩	7.43	2.11	1.19	15	61
18	"	黒曜石	4.97	6.43	1.65	44	39
19	"	チャート	7.23	4.41	1.07	27	36
20	"	砂岩	7.20	3.52	0.85	22	123
21	"	粘板岩	8.32	6.33	1.25	14	49
22	石細石	安山岩	2.59	2.00	0.42	2	96
23	石細石	黒曜石				3	100
24	石細石	"	4.35	3.24	2.43	32	112
25	石細石	"	2.25	1.69	1.44	6	57
26	石細石	"	2.82	1.41	1.45	9	IV層一括
27	削石器	"	2.51	(2.00)	0.91	29	125
28	削石器	頁岩	3.60	5.19	2.32	29	88
29	削石器	黒曜石	3.70	3.22	1.27	14	84

第4節 V層の調査

V層は、前述したように、シラスが土壌化して二次的に堆積した層であると考えられ、わずかに粘性を帯びる。調査区内のほぼ全域に堆積するが、北側のほうが堆積が厚く、南側は比較的堆積が薄くなっている。

この層からは、掘り込みをもたない集石（第28図）と、旧石器時代の遺物が検出された。

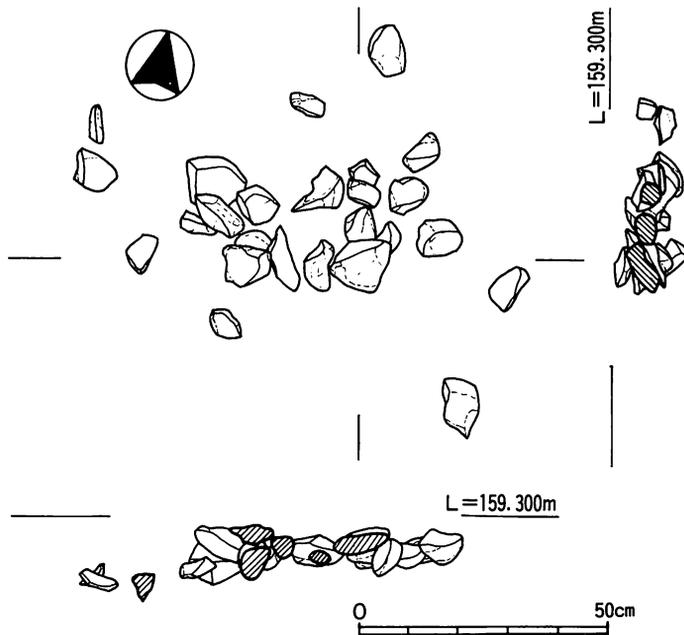
下層のVI層（シラス）上面の地形は、東側が比較的緩やかで、調査区南側のC列から西側がやや傾斜がきつくなり谷に落ちていく。（第29図）

1. 遺構について

V層中の礫の分布状況は、第29図に示したように、8号集石を除くと10点にも満たず、上層までの礫分布と比較しても、非常にまばらな分布状況となっており、IV層中の6号集石のような偶発的な集中の可能性は低いものと思われる。

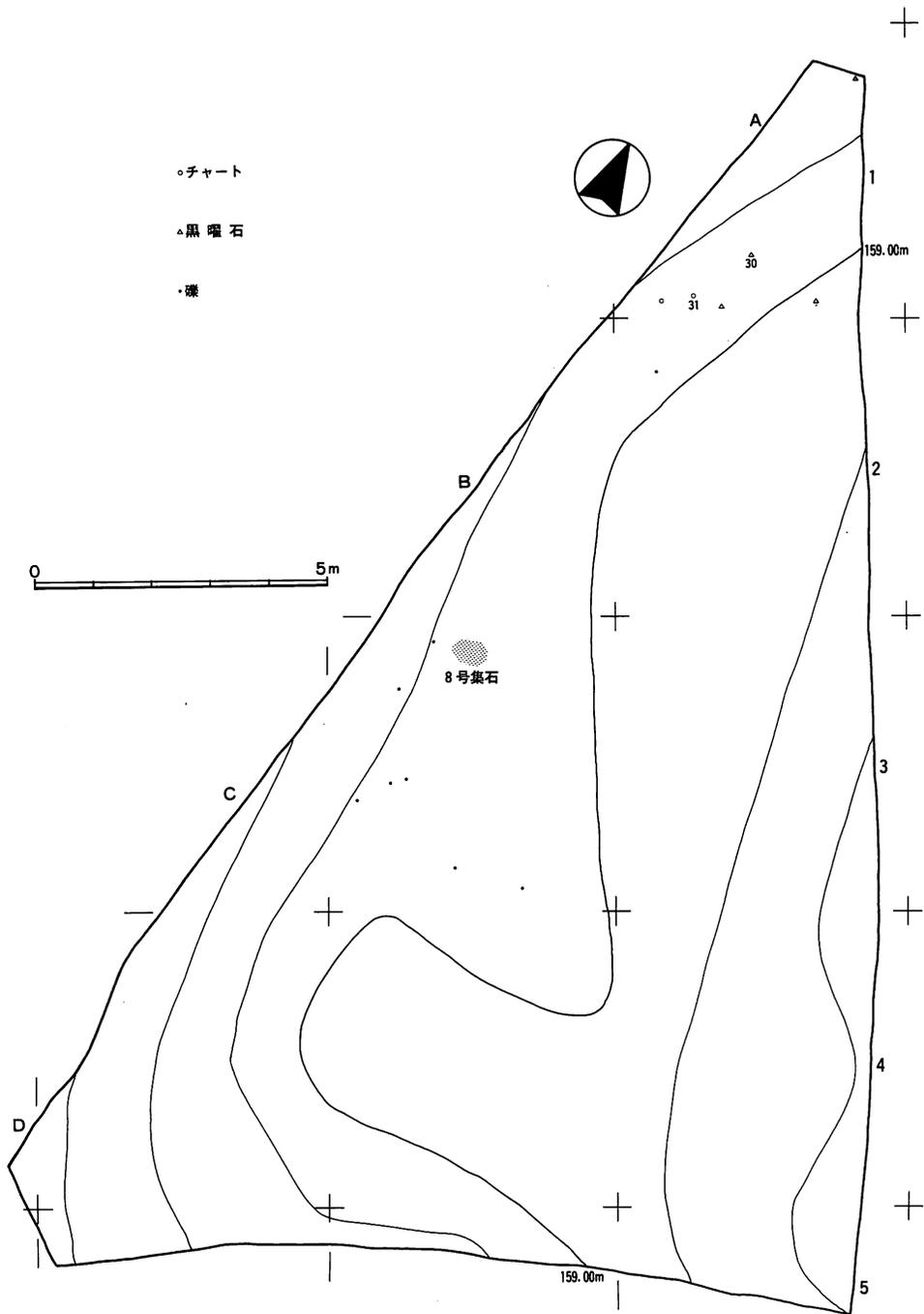
(1) 8号集石（第28図）

8号集石は、IV層直下に近い、V層の比較的上位で検出された。拳大の大きさを中心とした5cmから15cmまでの、円礫と破碎礫によって構成されており、確実に火を受け赤変している礫は確認できなかった。



第28図 8号集石実測図

礫の分布は、平面では長軸約0.90m、短軸約0.80mの楕円形の中におさまる状態で、比較的
 に中心部にかたまっており、やや東西に帯状に分布している。垂直分布は、比較的同一レベル
 に集中し、端部の最下位にある礫も中心部の最下位の礫も、ほぼ同じレベルで、レンズ状の分



第29図 V層集石・遺物・礫分布図

布は見られない。

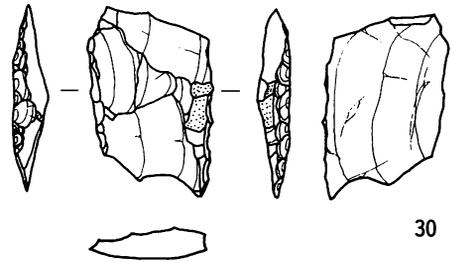
2. V層出土の遺物 (第28図・30図)

V層中からは、チャートや黒曜石の剥片類に加えて、2点の旧石器時代の遺物を検出することができた。

剥片類の出土レベルは、V層中の上位や下位にまとまりのない分布をしているが、この2点は、比較的下位にあり、VI層の上面から約5cmほど上位から出土している。また、2点とも、調査区内ではVI層上面の傾斜が、比較的緩やかな北側から検出された。

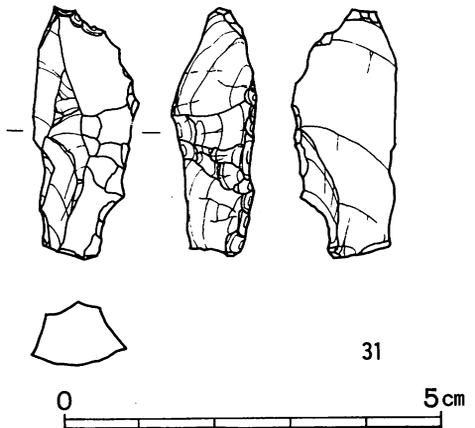
30は、チャート製の台形石器である。バルブの発達から見ると薄い剥片を素材としており、打面に極めて近いところで、主剝離面からのリタッチで切り断って打面を除く一方、中央部と先端部の真中あたりで、主剝離面からのリタッチで切り断っている。先端部は右端を鋭くし、自然縁との交差で尖端(刃)部を作りだしている。

大きさは、長さ2.47cm、幅1.69cm、厚さ0.43cmを測り、重さ2gを量る。



31は、チャート製のナイフ形石器である。厚い縦長の剥片を素材とし、右側縁に鋸歯縁状のリタッチを施している。最も厚い中央部では、両面から対向剝離でリタッチを施し、素材に背部を右縁に沿って作りだそうとしているが、瘤状の段部を残す結果となっている。また、先端部近くでは、素材が薄くなっているため打撃角が浅く、急角度のリタッチではない。したがって先端部に刃部縁を残すことになった。この点は、意図的なリタッチ打撃角の選択であろうと思われる。

大きさは、長さ3.25cm、幅1.39cm、厚さ1.09cmを測り、重さ4gを量る。



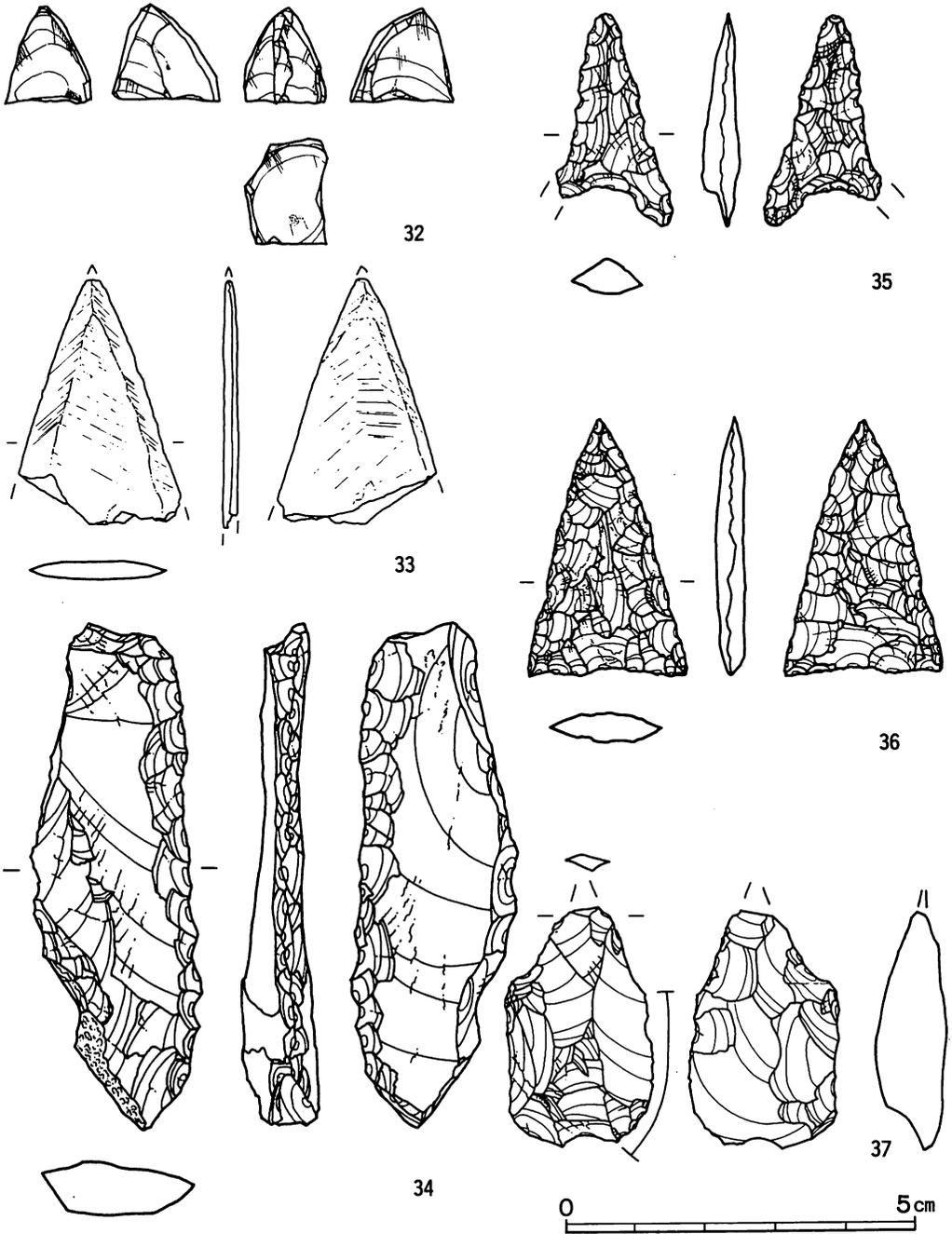
第30図 石器実測図 (V層)

第5表 V層石器計測表

No	器種	石材	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
30	ナイフ(台)	チャート	2.47	1.69	0.43	2	91
31	"(切出)	"	3.25	1.39	1.09	4	94

第5節 その他の遺物

その他の遺物とは、表土層等から出土し、本来含まれていた層位が、明らかでないものである。以下、遺物ごとに図版の順序で説明を加えていく。



第31図 石器実測図

32は、黒曜石の細石核の破片である。不純物があって、他のところに加えられた打撃の際に割れが生じてできた破片で、どの剝離面にも打点がないので、割れが最終的にこの資料に生じた現象である。

33は、千枚岩製の磨製石鏃で、弥生時代のものである。先端部と基部が欠損しており、残存部の大きさは、長さ3.42cm、幅2.29cm、厚さ0.20cmを測り、重さ2gを量る。

34は、安山岩製の削器で、横長の剝片を素材としている。大きさは、長さ7.15cm、幅2.42cm、厚さ1.10cmを測り、重さ16gを量る。

35は、安山岩製の石鏃で、二等辺三角形を呈する凹基（V字状の抉り）のものである。基部の一部を欠損しており、残存部の大きさは、長さ2.97cm、幅1.68cm、厚さ0.57cmを測り、重さ1gを量る

36は、チャート製の石鏃で、二等辺三角形を呈する凹基（浅い抉り）のものである。欠損はなく、大きさは、長さ3.60cm、幅2.30cm、厚さ0.45cmを測り、重さ3gを量る。

37は、チャート製の石錐である。横長の剝片を素材としている。錐部は剝片の先端部に設けられており、この錐部の作りだしによって、つまみ部と錐部が明瞭に区別されている。大きさは、長さ3.40cm、幅2.14cm、厚さ1.01cmを測り、重さ7gを量る。

第6表 石器計測表

No	器種	石材	計測値				欠損部位	登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
32	細石核	黒曜石	—	—	—	2	—	表土一括
33	磨製石鏃	千枚岩	(3.42)	(2.29)	0.20	2	先端・基部	"
34	削器	安山岩	7.15	2.42	1.10	16	基部	54
35	石鏃	"	2.97	(1.68)	0.57	1	基部	表土一括
36	"	チャート	3.60	2.30	0.45	3	—	"
37	石錐	"	(3.40)	2.14	1.01	7	先端部	"

第Ⅳ章 総 括

第 1 節 各層の調査成果の要旨

1. Ⅱ層上面

Ⅱ層上面の調査では、アカホヤの2次堆積土が削平されていたため、遺物は検出されなかった。

遺構はⅡ層に切り込んだ土杭が1基検出された。含土中の遺物は少ないが、春日式の系統と考えられる土器の口縁部が出土したため、時期は縄文時代の中期前半と思われる。遺構の性格は不明である。

2. Ⅲ層

Ⅲ層の調査では、アカホヤ下層の暗褐色土から、磨石、石皿、使用痕のある剥片等が検出され、土器は検出できなかった。検出遺物が少ないため、統計的なデータは出せないが、第17図の分布図で見ると、石皿破片の分布が目立っている。

遺構は、Ⅳ層に切り込んだ掘り込みを持つ集石が、調査区の南側を中心に5基検出された。なかでも2号集石は、最も規模が大きく、四百個前後の破碎礫によって構成されていた。5基とも、遺物は検出されなかった。

また、掘り込みのⅢ層を基調とした含土に少量の炭化物を含むものが多いが、3号集石だけは、炭化物が土壌化したような黒色土を含土としている。

集石以外の礫の分布状況は、北側を除いて、各集石遺構の付近に集中する傾向が見られた。遺物・遺構の時期については、集石からの出土遺物がないのに加えて、時期を決定できるような資料に乏しく、層位的に縄文時代早期としか言えない。

3. Ⅳ層

Ⅳ層の調査では、土器片数点と、石皿、使用痕のある剥片、石鏃、削器、石核、細石核等を検出することができた。

土器片には、その器形や形式を特定できるものはなかった。また、細石核とその他の遺物の出土状況は混在しており、細石核だけⅣ層の下位に分布するという状況はなかった。

土器、石器に加えて、Ⅳ層中からは大量の破碎礫が検出されているが、その性格は不明である。また、この破碎礫の集中する2箇所を集石として取り扱っているが、掘り込みの有無は確認できていない。

4. V 層

V層の調査では、2点の旧石器時代の遺物（台形石器・ナイフ形石器）を検出することができた。

また、礫をほとんど含まないこの層の比較的上位から、集石の可能性のある礫のまとまりを検出している。

第2節 調査成果と問題点

第1節に示した調査成果から問題点をあげておきたいと思うが、各層に共通して言えることは、調査範囲の問題である。調査範囲は、第5図の遺跡周辺地形図に示したとおり、遺跡の推定範囲の南西部のごく一部であり、遺物・遺構の検出状況からも、遺跡の中心部ではないと考えられる。

したがって、調査成果と問題点も、未調査部分を踏まえた点も多いが、以下、各層ごとにあげてみたい。

1. II層上面

II層上面からは、春日式の系統と思われる土器片を伴う土杭が検出されている。この土器片は遺構基底部のものではなく、土杭の埋土中からの検出であるため、未調査部分からの流れこみの可能性もあり、調査区外に中期の生活面の中心部が残存する可能性が考えられる。

春日式系の土器については、人吉市鼓ヶ峰遺跡のVI a層からIII類として報告されているものがあるが、これとは異なった様相を示している。この土器の位置付けについては、今後の調査例の増加を待ちたい。

2. III層

III層からIV層上面に切り込んだ掘り込みのある集石遺構が5基検出されているが、調査区の南側に、比較的集中している。この傾向が、調査区外にもあるとすれば、集石の用途も含めて問題となるであろう。

3. IV層

IV層の調査では、層中に含まれる多量の破碎礫の位置付けが問題となってくる。III層の集石の周辺に分布する傾向と同様に、調査区外にある集石と関連するものなのか、また別の状況を示すものなのか、ここで結論を出すことはできない。

また、細石核については、それだけが独自に含まれる層は確認できなかったが、細石刃が1

点も検出されていないことを踏まえると、未調査部分に細石器文化の層が所在し、そこから丘陵裾部の調査区に流れこんで、他の遺物と層位的に混在した可能性も考えられるであろう。

4. V 層

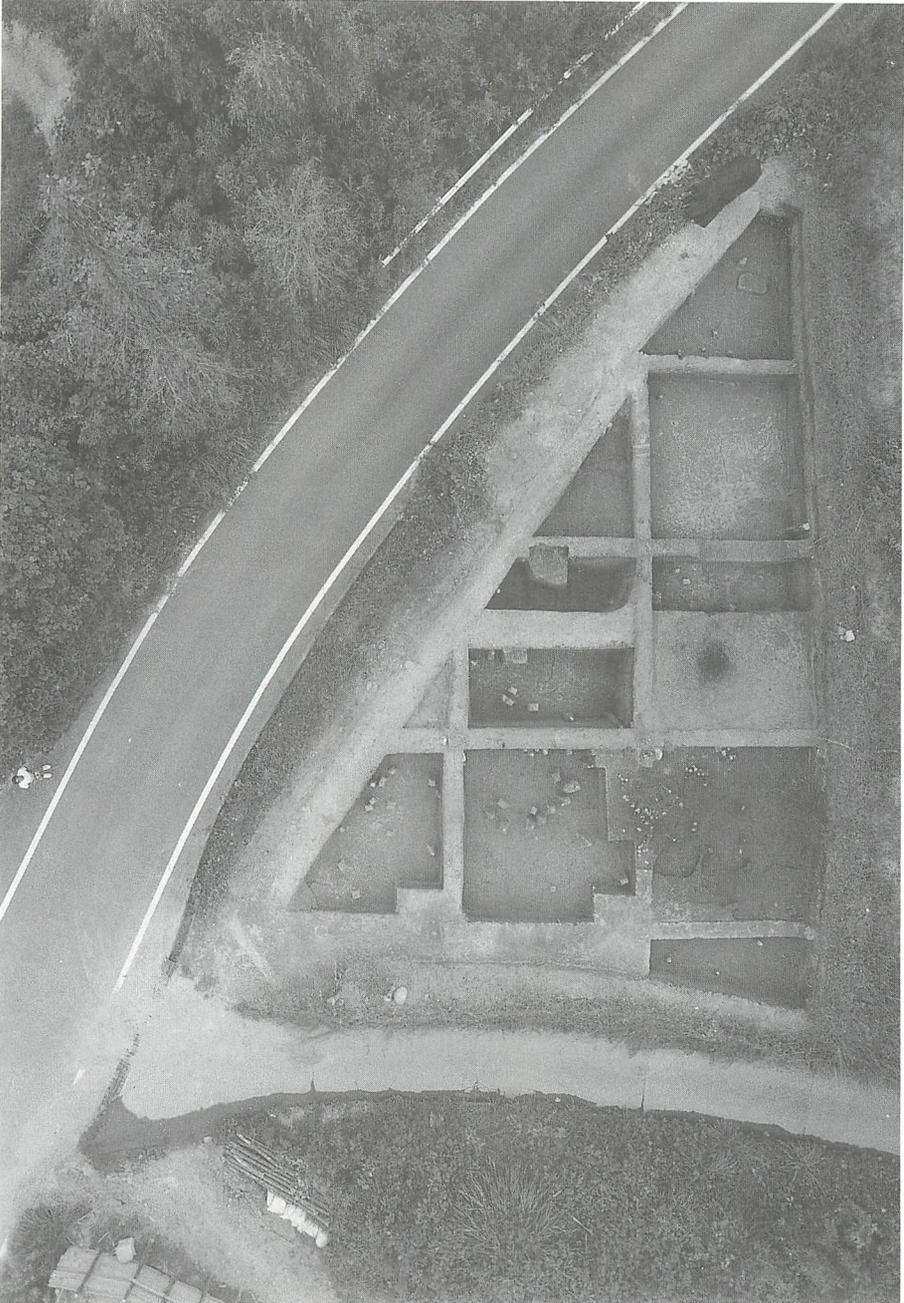
V層からは、旧石器時代の製品2点が検出されたが、それに伴う剥片類は検出されていないため、他の地点から持ち込まれた、あるいは流れこんだと考えられる。

参 考 文 献

- 肥後考古学会 1985 「旧石器時代遺跡分布図」『肥後考古』第5号 特集：熊本の旧石器文化 熊本
- 鶴嶋俊彦 1992 『人吉市遺跡地図』 人吉市教育委員会 人吉
- 熊本県 1985 『球磨川流域環境利用ガイド』 熊本
- 熊本県企画開発部 1982 『土地分類基本調査』 熊本
- 木崎康弘他 1986 『大丸・藤ノ迫遺跡』 熊本県文化財調査報告 第80集 熊本
- 〃 1987 『狸谷遺跡』 熊本県文化財調査報告 第90集 熊本
- 西住欣一郎他 1988 『鼓ヶ峰遺跡』 熊本県文化財調査報告 第96集 熊本
- 大田幸博他 1989 『七地水田遺跡』 熊本県文化財調査報告 第101集 熊本
- 〃 1990 『城馬場遺跡・高城跡Ⅶ郭』 熊本県文化財調査報告 第110集 熊本
- 西住欣一郎他 1990 『天道ヶ尾遺跡(Ⅱ)』 熊本県文化財調査報告 第111集 熊本

写真図版

図版1 調査区全景

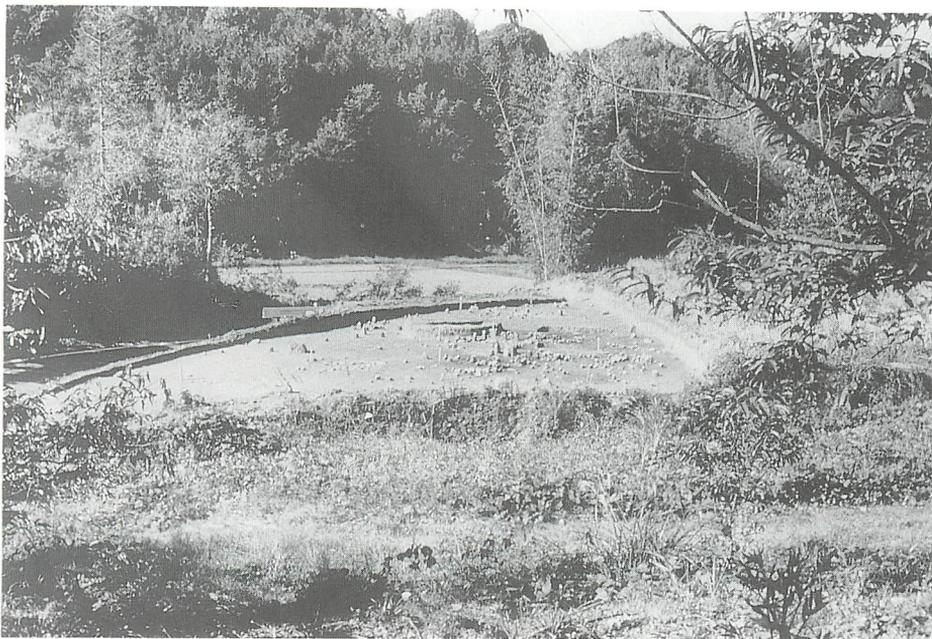


図版 2 調査区遠景

調査区遠景 (東南から)



図版3 調査区近景



1. 調査区近景（東から）



2. 調査区近景（南から）

図版4 1号土坑



1. 1号土坑土層（東から）



2. 1号土坑（東から）

図版5 1号・3号集石

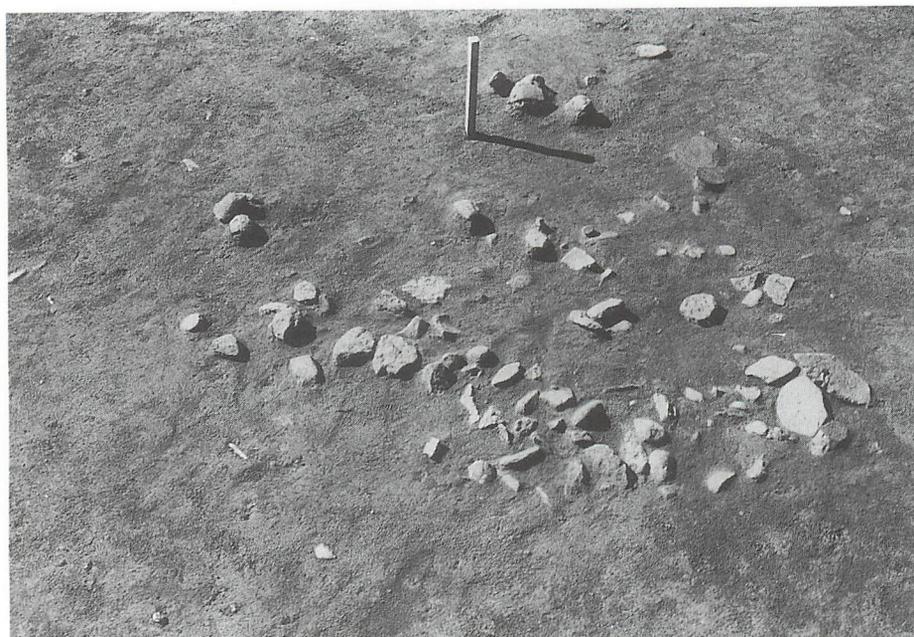


1. 1号集石掘り込み（南西から）



2. 3号集石検出状況（北から）

図版6 2号集石



1. 2号集石検出状況（東南から）

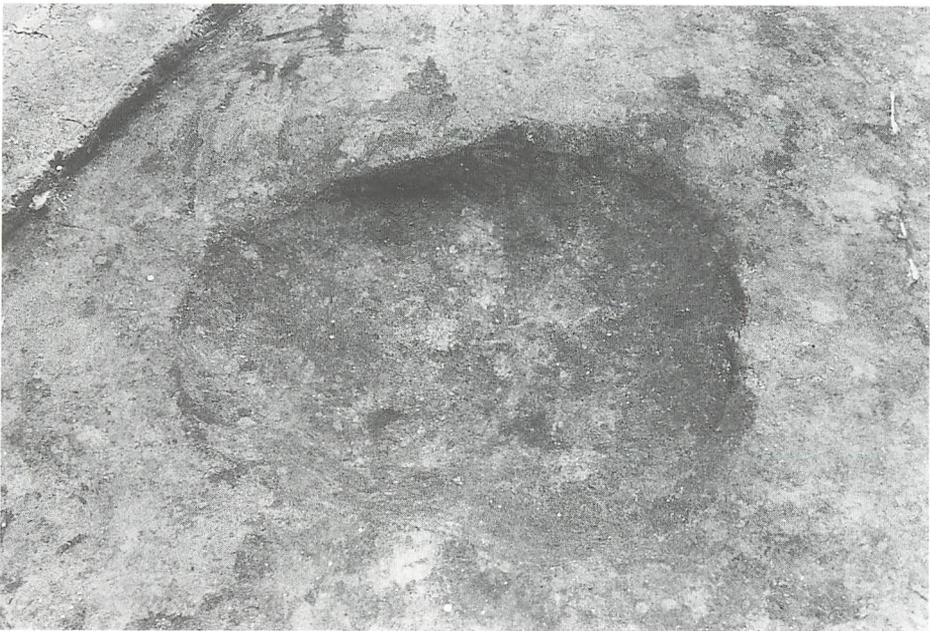


2. 2号集石掘り込み（北東から）

図版7 4号集石



1. 4号集石検出状況（北西から）

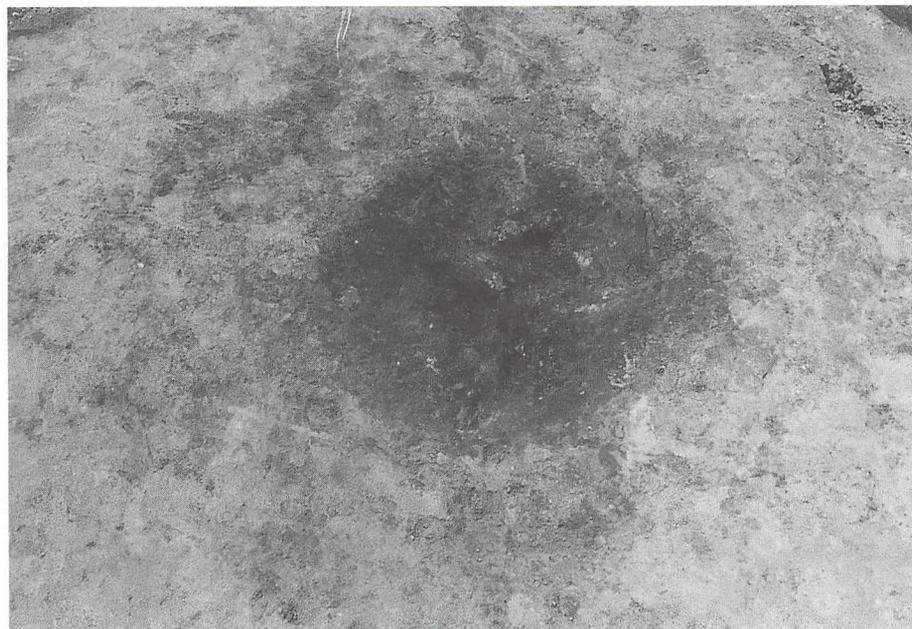


2. 4号集石掘り込み（北東から）

図版 8 5号集石



1. 5号集石検出状況（東から）



2. 5号集石掘り込み（南から）

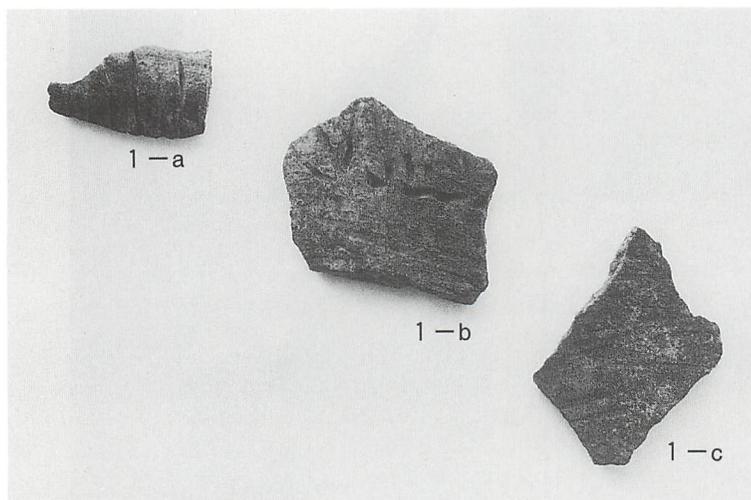


1. 6号集石（東から）

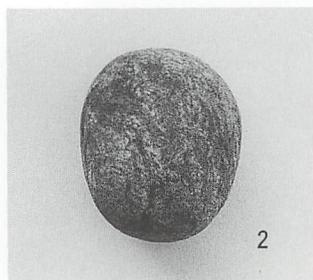


2. 8号集石（南から）

図版10 1号土坑出土遺物



1. 1号土坑出土土器(約 $\frac{1}{2}$)

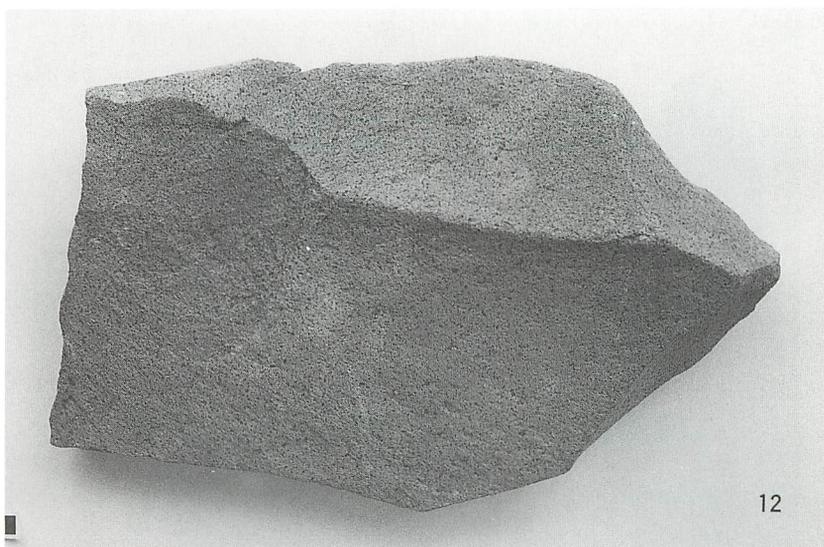


2. 1号土坑出土石器(約 $\frac{1}{2}$)

図版11 6号集石出土遺物

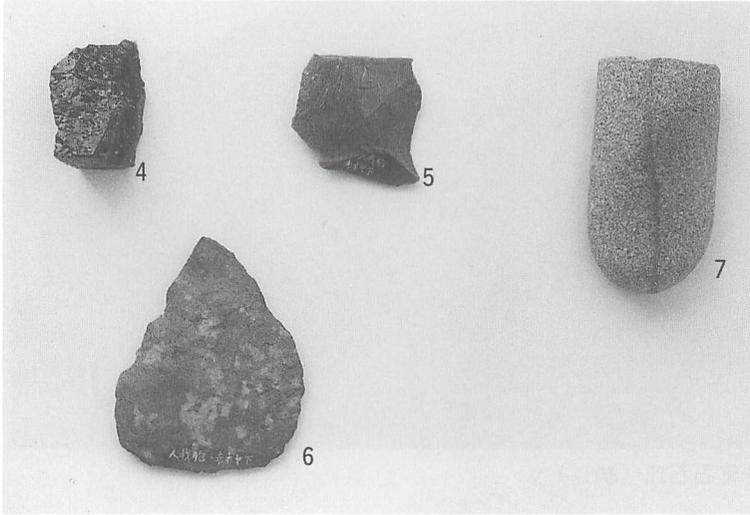


1. 6号集石石皿（約 $\frac{1}{5}$ ）

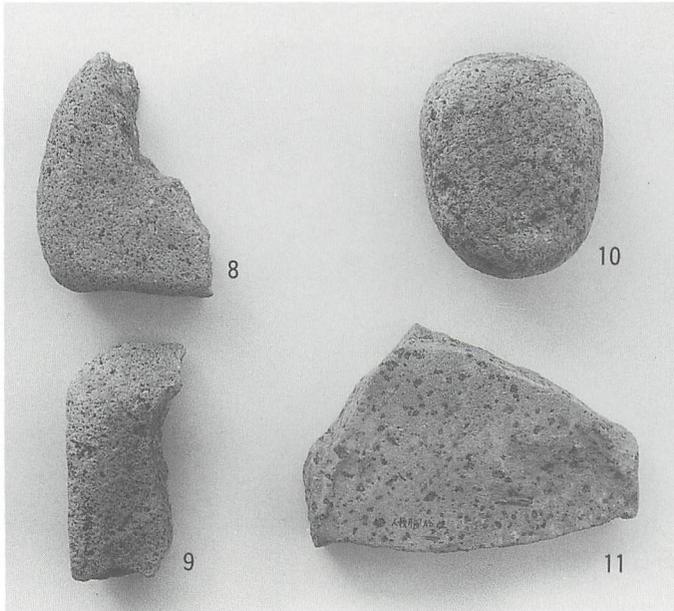


2. 6号集石石皿（約 $\frac{1}{5}$ ）

図版12 Ⅲ層出土遺物

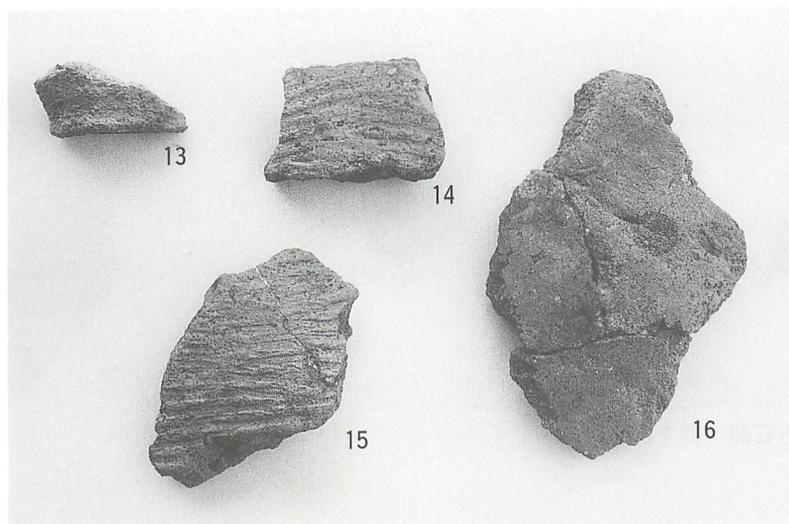


1. Ⅲ層出土石器 (約 $\frac{1}{2}$)

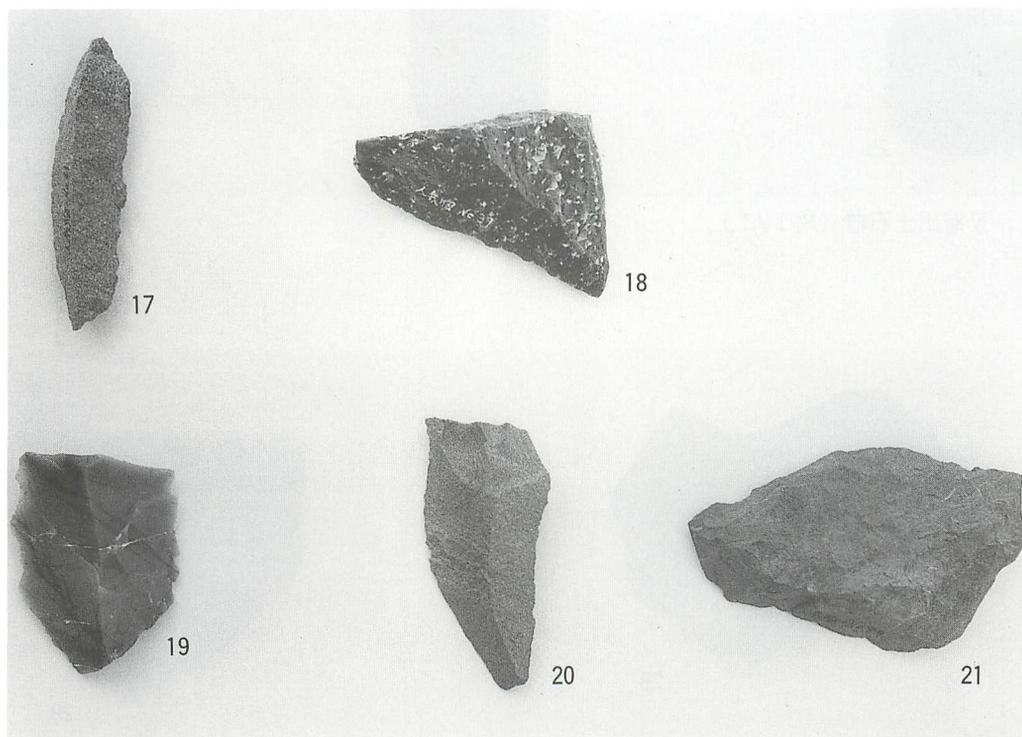


2. Ⅲ層出土石器 (約 $\frac{1}{3}$)

図版13 IV層出土遺物



1. IV層出土土器 (約 $\frac{1}{2}$)

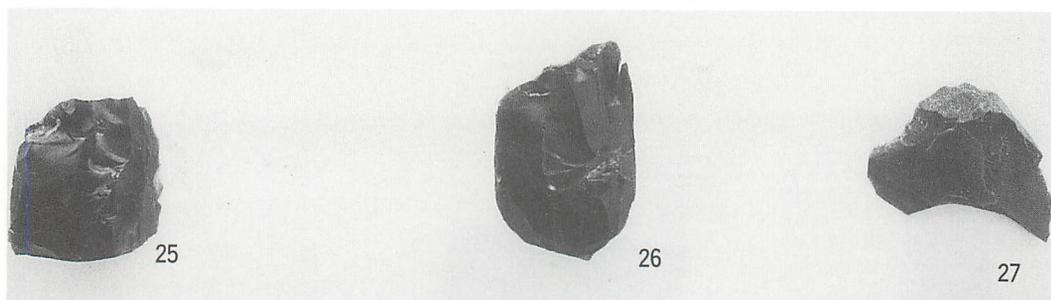


2. IV層出土石器 (約 $\frac{1}{2}$)

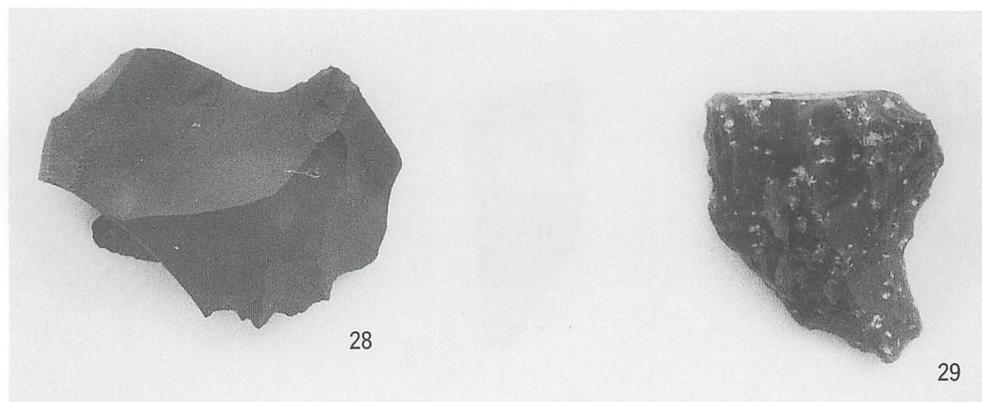
図版14 IV層出土遺物



1. IV層出土石器 (約 1/1)

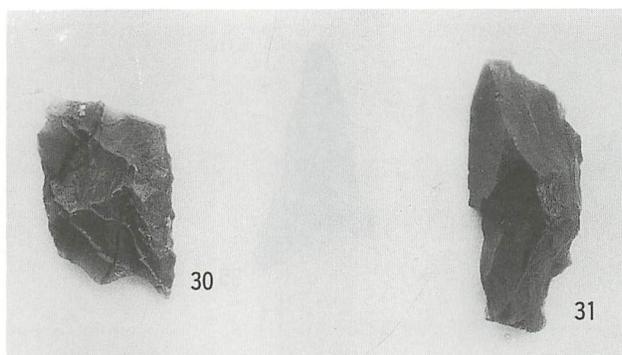


2. IV層出土石器 (約 1/1)

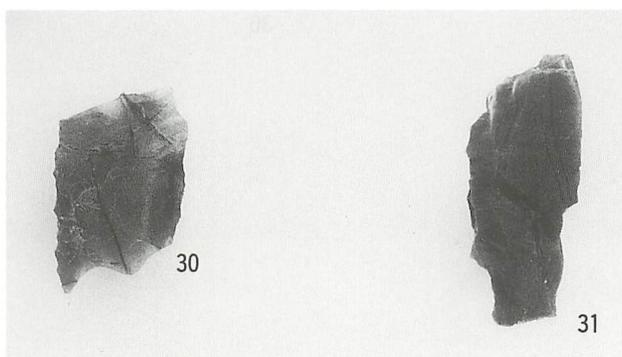


3. IV層出土石器 (約 1/1)

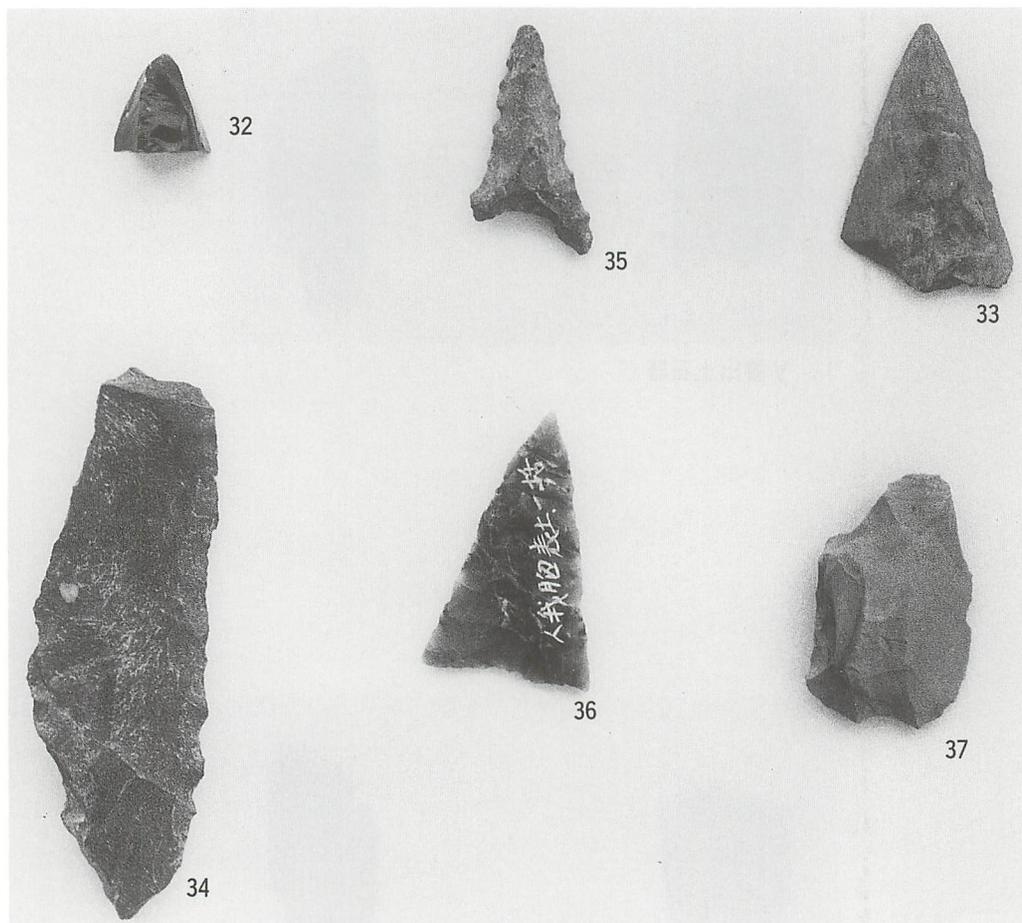
図版15 V層出土遺物



1. V層出土石器



2. V層出土石器



あ と が き

発掘調査の合間を縫うようにして、狭い調査面積の報告書ですが、ようやく発行にこぎつけることができました。

報告書を作成するには、発掘現場のつらい仕事や根気のいる整理作業を経てきました。ここに、そのさまざまな過程で、お世話になった方々の御芳名を記して感謝の意を表します。

お世話になりました。

発掘調査	丸尾 栄子	西 和子	山本せい子	中村めぐみ	中村 みか
	平林富士子	赤池 睦子	松村 和代	福川シマエ	宮原 辰代
	石山ヒトエ	坂本 勝喜	早坂 渉	中川 裕二	

発掘調査・ 遺物整理	尾形 信子	佐田みよ子
---------------	-------	-------

遺物整理	林 枝三
------	------

報告書作成	新東 晃一	西住欣一郎	木崎 康弘	宮坂 孝宏	長谷部善一
	白井 勝子	白石 巖			

熊本県文化財調査報告第132集

しま まわり
島 廻 遺 跡

1993年3月31日

編集発行：熊本県教育委員会

〒862 熊本市水前寺6丁目18-1

TEL096-383-1111(代)

文化課文化財調査係(内線6716)

印刷：中央印刷紙工株式会社

〒860 熊本市田崎2丁目5-38

TEL096-354-4191

04 教委 教文

② 011

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 132 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：島廻遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL： <http://www.kumamoto-bunho.jp/>